

令和4年度 香川県小学校社会科教育研究会 研究部提案（案）

研究テーマ

多様な他者とともに、これからの時代を主体的に生き抜くための
社会形成力を育てる社会科学習の創造
～公民としての資質・能力の基礎をはぐくむ学習論の再構築～

1 香社研の研究の方向性

2 香社研の研究の経緯

- ◆【内容研究として】
- ◆【方法研究として】

3 研究主題について

- (1) 研究主題設定の理由
- (2) 公民としての資質・能力を育てる社会科教育
- (3) 社会形成力とは
- (4) 社会科の目標に向かう、幼・保、小、中、高のつながりを明らかにする。

4 研究の方向性

- (1) 研究の視点（研究仮説）について
 - ◆ 視点(研究仮説)Ⅰ…主に内容知(社会形成力を育成する内容の精選)の側面から
 - ◆ 視点(研究仮説)Ⅱ…主に学習論(社会的な見方・考え方の深化)の側面から
 - ◆ 視点(研究仮説)Ⅲ…主に実践知(教育課程を通して他教科や他領域、経験等との有機的な関連を図った実践的社会形成力の育成)の側面から
- (2) 資質・能力の育成について
- (3) 学習論について

5 研究内容

- ◆ 視点(研究仮説)Ⅰ…主に内容知(社会形成力を育成する内容の精選)の側面から
 - (1) 内容研究について
 - ① 公民としての資質・能力を育てる地域学習
 - ② 公民としての資質・能力を育てる国土理解・産業学習
 - ③ 公民としての資質・能力を育てる政治学習
 - ④ 公民としての資質・能力を育てる歴史学習
 - (2) 社会形成力を育む社会科カリキュラム全体構想案
 - (3) 社会科カリキュラム全体構想で育てたい「社会形成力につながる資質・能力」
 - (4) 令和4年度版 香社研版 社会形成力を育む社会科カリキュラム全体構想案
- ◆ 視点(研究仮説)Ⅱ…主に学習論(社会的な見方・考え方の深化)の側面から
 - (1) 生きて働く知識を獲得する過程で社会的な見方・考え方を育む
 - (2) 社会的な見方・考え方を育む学習過程や支援と知の構造化

方策Ⅰ	授業づくりの段階 知の構造化(知識の構造図づくり)
方策Ⅱ	社会的な見方・考え方を働かせる学びの過程を明らかにする
方策Ⅲ	社会的な見方・考え方を働かせる本時の学習構造
方策Ⅳ	学校教育目標と本時をつなぐ社会科授業構想シート
- ◆ 視点(研究仮説)Ⅲ…主に実践知(教育課程を通して他教科や他領域、経験等との有機的な関連を図った実践的社会形成力の育成)の側面から
 - (1) 教科等横断的な視点から、社会科と他教科・他領域との関連を図り、実践的社会形成力を育てる
 - (2) 実践的社会形成力を育むための、問題解決過程の類型について
 - (3) 実践的社会形成力を育てるカリキュラムの年間計画

**多様な他者とともに、これからの時代を主体的に生き抜くための
社会形成力を育てる社会科学習の創造
～公民としての資質・能力の基礎をはぐくむ学習論の再構築～**

香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 轟 秀明 水口 純 藤澤 大地

0 研究主題の文言について

- ※1 「**多様な他者**」は、学習指導要領解説「改訂の経緯」にて示されているグローバル社会への対応を意識したものである。「**社会形成力**」は、社会諸科学、自然科学等の科学の論理と子どもの経験や既有知識をもとにした生活の論理をもとに、社会に開かれた教育課程全体を通して育成するという「**社会に開かれた資質・能力**」を育成するという意図がある。また、私たちが現在生きている社会に参加・参画するという単純な意味だけでなく、これからの時代を創る子どもたちが社会参画につながる学習を通してよりよい社会を創っていく「**未来志向的な資質・能力**」を育成するという二つの意図を含んでいる。
- ※2 「**再構築**」にはこれまでの香社研の研究の礎の上に次のような考えを取り入れるという意図が含まれている。（次項 2 香社研の研究の経緯参照）
- ※3 これからの社会がより一層急激に変化する時代を迎え、一人一人が様々な課題に主体的に対処して生き抜いていくためには、常に合理的な社会的判断を行い、適切な社会的行為を選択・決定していくための資質・能力の育成が急務である。小学校社会科教育においては、社会的な見方・考え方をどのように働かせて、こうした資質・能力を育成するのかなど、子どもだけでなく教師自身の資質・能力の向上が問われてくる。こうした中で、これまでの社会科授業論を踏襲するだけでなく、常に「教育の不易と流行」を見定めつつ、これまでの先輩諸氏による実践研究の礎の上に立ち、常に「継承と発展」によって再構築するというねらいがある。

1 香社研の研究の方向性

本研究会は、社会科学研究の筋道として、発足当初から常に子どもの学びの姿をもとに、内容研究と学び方の方法研究を両輪として社会科学習の研究を行ってきた。そして、単元を通じた学習論の研究と共に、一単位時間の学びの過程を類型化し、授業実践を通じて研究を深めてきた。さらに近年は、各学校における特色ある学校づくりという視点を取り入れ、教育課程における社会科の位置づけや社会科と他教科等との関連を図る研究に発展し、カリキュラム・マネジメントを意識した研究へと社会科学習の可能性の幅を広げてきた。また、現代的な諸課題等の新たな学習内容やICT機器やプログラミング的思考を取り入れた学習方法の研究により、変化の激しい社会に生きる子どもたちが、何をどのように学び、何ができるようになるかという資質・能力を育む視点から社会科の本質的な学びを再構築してきた。

現在、平成から令和の時代が変わり、学校教育における学びの在り方が、「主体的・対話的で深い学び」という視点に焦点化されると共に、令和の日本型教育として個別最適な学びと協働の学びという学習論が取り上げられている。香社研においても従来から、指導の個別化、学習の個性化の両面から学習論を展開してきており、方向性として一致するものである。

このような社会的背景から、今回改めてこれまでの香社研の研究を振り返るとともに、今後の新しい研究の方向性を打ち出したい。

2 香社研の研究の経緯

【内容研究として】

- 社会認識の系列化
- 人間環境を見つめた学習
- 社会認識をひらく(地理的・歴史的・公民的内容)

【方法研究として】

- 経験学習(地域課題)と問題解決学習
- 学習構造化論(学習構造と思考構造) ・ 問題解決的思考
- 典型学習論
- 問いと論証の調べ学習、思考力・表現力の育成
 - ・ 教材反応学習、反応類型学習、課題選択学習
 - ・ 指導の個別化と学習の個性化
- 特色ある教育課程
 - ・ 総合的な学習の時間・生活科との関連
 - ・ 課題単元、教材単元
- 基礎・基本の定着と発展の学習
 - ・ 定着学習と発展学習
 - ・ 内容知と方法知
 - ・ できるから分かる学習へ
- 学びの過程と社会科ノートづくり
 - ・ 習得・活用・探究の学びを深める言語活動
 - ・ 思考と表現の重層化
 - ・ 自己調整と再構成の学習
- 社会に開かれた教育課程
 - ・ 問題解決的実践学習
 - ・ 見方・考え方・生き方を働かせる社会認識学習論
 - ・ 教科横断的な視点に立つ2タイプの社会科授業構想

3 研究主題について

(1) 研究主題設定の理由

「学習指導要領解説 社会科編」第1章 総説では、今回の改訂の経緯を以下のように示している。

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。

つまり、子どもたちを取りまく「社会」が加速度的に、しかも複雑に変化し、予測困難になっているということである。もう一步踏み込んで考えてみると、今ある社会は完成してしまったものではなく、グローバル化の進展や技術革新等によって変化していくものであると捉えることができるであろう。社会をこのように解釈するならば、よりよい社会となるよう一人一人の市民が現状に満足することなく、手を加え続けていく必要があると考えられる。

前回の学習指導要領では、社会科の目標として「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」と書かれている。しかし「主体的に社会の形成に参画しようとする態度等の育成が不十分であった」という課題が挙げられていた。今後、将来の予測をすることが難しい時代において、社会の形成者として現代的な諸課題に対し、社会の一員として課題に向き合い、よりよい社会や人生の創り手となっていけるようにすることが求められているのである。

現実社会に目を向けてみると、ここ数年は新型コロナウイルスの感染拡大によって浮き彫りとなった世界的な民主主義社会の揺らぎ等予測困難な出来事や、例えば有名アスリート選手が SNS 等を活用して積極的に自己の考え方を発信する姿への反応より見えてきた、他者への共感性や想像力の欠如による問題が発生している。また、AI 社会の到来やグローバル化、情報化社会の進展、SDGs への取り組み等に対する世界的な関心の高まり等によって、子どもたちはより一層、社会への関心を高め、よりよい社会を創るための思考力・判断力、主体的な態度等が求められている。このような時代背景に即して、本主題を設定した。

(2) 公民としての資質・能力を育てる社会科教育

社会科教育では、社会科発足当初から究極のねらいとして「公民的資質の基礎を養う」ことが掲げられてきた。以降の改訂においてもそのねらいは変わらず、今回の学習指導要領改訂において、そのねらいが「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」と文言の変更があった。「公民的資質の基礎」から「公民としての資質・能力の基礎」と文言は変わったが、いずれにしても公民として生きる基礎を養うというねらいは現在までも受け継がれている。

今回の学習指導要領改訂において、具体的な改善事項については以下のように示されている。

(iii) 具体的な改善事項（小学校）

- 小学校社会科においては、①世界の国々との関わりや政治の働きへの関心を高めるよう教育内容を見直すとともに、②自然災害時における地方公共団体の働きや地域の人々の工夫・努力等に関する指導の充実、③少子高齢化等による地域社会の変化や④情報化に伴う生活や産業の変化に関する教育内容を見直すなどの改善を行う。
- 小学校社会科においては、これまで第4学年から配布されていた「教科用図書 地図」を第3学年から配布するようにし、グローバル化などへの対応を図っていく。

具体的な改善の内容としては、例えば、中学年においては市役所の働きや税金の使われ方など、地方公共団体の働きという内容の充実が図られている。

例えば、東京 2020 オリンピック・パラリンピックでは多様性と調和が目標として掲げられ、一層進展するグローバル化の流れの中で、人種、性別、宗教等を超えて互いに尊重し合える関係性が求められ、改めてグローバル化に対応した「公」とは何かを考えるきっかけとなった。このことを小学校社会科教育につないで考えてみると、公民としての資質・能力の基礎の意味を改めて問い直されているのではないかと考える。各個人が、自分の存在する集団や社会を理解し、自分の役割を自覚し、必要とされる知識・技能や教養を身に付けた公民となるためにも、社会や集団を構成する一人の人間としての成長が欠かせない要件でもある。

これまでもよく使われてきた「生きる力」には、個々人が「主体性をもって生きること」、「豊かに生きること」とともに「他者とともに生きること」という視点が欠かせない。公民としての資質・能力の基礎とは、個人的な成長に関することに加え、社会的な成長を統合した概念であるといえる。自然を

含めた社会や他者との関わりの中で、人間関係を確立し社会的に生きる視点でもありと捉える。また、それは、他者の個性を尊重し、異質性への寛容、相手の立場に立つ想像性、共感性、他者を思いやる心などの社会的に生きるための資質・能力であるともいえる。

さらに、今回の学習指導要領では、各教科等における育てたい資質・能力として、評価の観点を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に一本化し、全体として3観点からの資質・能力の育成が軸として掲げられている。

香社研としても、グローバル化した新しい時代を生き抜く子どもにとって必要な学習内容とは何か、育てたい資質・能力とは何か、またそのための学習のあり方を原点に立ち返って改めて問うていきたい。

(3) 社会形成力とは

今回の学習指導要領や社会形成力を育む社会科学習の実現に向けて、社会科の学習内容の改善の視点として以下の3点を挙げる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 新しい時代に生きる子どもに応える内容になっているかどうか。(内容面)② 実際の社会生活を営んでいく上で、必要な内容になっているか。(人間性)③ 身に付けた内容や資質・能力がその後の生活や学習の中で生かせるようになっていくか。(実践的) |
|---|

社会を構成する一人一人の人間が社会的義務を果たし、人としての権利を執行し、社会人としてのマナーやモラルを守り、社会的貢献活動に取り組むことが大切である。このことは、社会科教育の本来的なねらいである公民としての資質・能力の基礎の育成と共通する部分が多い。

香社研がねらいとする公民としての資質・能力をもつ人間を育成するとは、私たちの住んでいる集団や社会への認識を深め、積極的によりよい社会を実現させていこうとする人間を育てることである。

「社会に開かれた資質・能力」及び「未来志向的資質・能力」とは、様々に複雑な条件が絡み合っている集団や社会を多角的に認識し、そこに生じている諸問題を解決し、より望ましい社会を創っていく資質・能力である。そのためには、社会的な見方・考え方を働かせて、多角的に思考・理解することが基本である。現実の集団や社会の仕組みや在り方を正しく理解することによって、集団や社会に対する誇りや愛情、地域社会や国民としての自覚をもち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力をもった人間を育てることができるのではないかと考える。

こうした考え方に立ち、研究主題にある社会形成力を次のように捉えることとする。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">◎ 「社会形成力」とは、現代社会にあって、将来どのような集団や社会にしたいかという見通しをもち(未来志向的な学びの視点)、科学の論理や既有知識及び経験をもとに集団や社会の中で何ができるかを他者との関わりの中で考え(社会に開かれた学びの視点)、自己の社会的立場や役割を自覚し、それに基づき行動できる未来志向的かつ社会にひらかれた資質・能力(学習指導要領の3観点)と捉える。◎ そして、この力は、3つの枠組みから成り立つと考える。<ul style="list-style-type: none">① 「自分がその集団や社会の一員であることへの認識」② 「自分が生きている集団や社会への誇り・愛情」③ 「自分が生きている集団や社会の発展に尽くそうとする力」である。 |
|---|

この枠組みは、最終的には「自分が生きている集団、社会の発展に尽くそうとする力」の育成に収斂される。そのために、その過程で社会的な見方・考え方を繰り返し働かせ、構造的な社会認識を構築することを目指していく。

(4) 社会科の目標に向かう、幼・保、小、中、高のつながりを明らかにする。

社会科は小・中学校の9年間で完結するが、社会形成力はこの期間だけではなく、幼稚園や保育園、そして高等学校の学びも含めて養っていくべきものである。そのため、小・中学校以外の学校種の社会形成力に関わる部分を整理し、そのつながりや連続性を明らかにしていく。他校種での学びを整理することで、小学校社会科の役割が明確に見えてくると考える。

例えば、幼稚園やこども園で育む力として注目されているものの一つに「非認知能力」というものがある。結果で測る認知能力で測るだけでなく、数値化できない「生きていくために必要な能力」を育むことが、その後の人生を豊かにすることにつながるとされている。何を学んだのかではなく、どのように学んだか、経験そのものを大切にしていける幼児教育ならではの視点である。このような非認知能力の考え方は、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」としてまとめられている。

視点	子どもの姿
1 健康な心と体	幼稚園生活の中で充実感や満足感を持って自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら取り組み、見通しを持って自ら健康で安全な生活を作り出していけるようになる。
2 自立心	身近な環境に主体的に関わりいろいろな活動や遊びを生み出す中で、自分の力で行うために思い巡らしなどして、自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げることで満足感や達成感を味わいながら、自信を持って行動するようになる。
3 協同性	友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる。
4 道徳性・規範意識の芽生え	してよいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりを守る必要性が分かり、決まりを作ったり守ったりするようになる。
5 社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちを持ちつつ、いろいろな人と関わりながら、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に一層の親しみを持つようになる。遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報を伝え合ったり、活用したり、情報に基づき判断しようとしたりして、情報を取捨選択などして役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用したりなどして、社会とのつながりの意識等が芽生えるようになる。
6 思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わり、物の性質や仕組み等を感じ取ったり気付いたりする中で、思い巡らし予想したり、工夫したりなど多様な関わりを楽しむようになるとともに、友達などの様々な考えに触れる中で、自ら判断しようとしたり考え直したりなどして、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
7 自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、身近な事象への関心が高まりつつ、好奇心や探究心を持って思い巡らし言葉などで表しながら、自然への愛情や畏敬の念を持つようになる。身近な動植物を命あるものとして心を動かし、親しみを持って接し、いたわり大切にする気持ちを持つようになる。
8 数量・図形、文字等への関心・感覚	遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形、文字等への関心・感覚が一層高まるようになる。
9 言葉による伝え合い	言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたりしたことなどを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。
10 豊かな感性と表現	みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる。

一方で、高等学校では、『現代社会』に代わる必履修科目「公共」が2022年から始まる。選挙権年齢が18歳以上となり、若い世代への主権者教育の必要性が高まっている。「公共」には、「主体的、対話的で深い学び」の実現と、18歳選挙権年齢に伴う主権者教育の2つの側面の相乗効果が期待されている。特に「公共の教育」の考え方は、以下のように、高等学校だけではなく、小中学校からの体系的な実施が求められている。

議会制民主主義を定める日本国憲法の下、民主主義を尊重し責任感をもって政治に参画しようとする国民を育成することは学校教育に求められる極めて重要な要素の一つであり、18歳への選挙権年齢の引下げにより、小・中学校からの体系的な主権者教育の充実を図ることが求められている。

- また、主権者教育については、政治に関わる主体として適切な判断を行うことができるようになることが求められており、そのためには、政治に関わる主体としてだけでなく広く国家・社会の形成者としていかに社会と向き合うか、例えば、経済に関わる主体（消費者等としての主体を含む）等として適切な生活を送ったり産業に関わったりして、社会と関わるができるようになることも前提となる。
- こうした主権者として必要な資質・能力の具体的な内容としては、国家・社会の基本原則となる法やきまりについての理解や、政治、経済等に関する知識を習得させるのみならず、事実を基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力や、課題の解決に向けて、協働的に追究し根拠をもって主張するなどして合意を形成する力、よりよい社会の実現を視野に国家・社会の形成に主体的に参画しようとする力である（次項資料参照）。これらの力を教科横断的な視点で育むことができるよう、教科等間相互の連携を図っていくことが重要である。
- これらの力を育んでいくためには、発達段階に応じて、家庭や学校、地域、国や国際社会の課題の解決を視野に入れ、学校の政治的中立性を確保しつつ、例えば、小学校段階においては地域の身近な課題を理解し、その解決に向けて自分なりに考えるなど、現実の社会的事象を取り扱っていくことが求められる。

中央教育審議会答申 平成28年12月21日より

高等学校の公共は、主権者教育の1丁目1番地と言われている。公共では、答のない問いに対して、事実を見極め、その事実にもとづいて自分の意見を表明できる力を育むことが目指されている。そのような力をベースに他者と意見交換ができ、他者の意見も尊重して傾聴できる態度を育てていくのが公共のねらいである。さらに、他者の意見を傾聴できる態度と同時に、その意見はどんな背景から発想されているかの事実関係もしっかりと見極める。このような部分が公共で大事な資質・能力であり、主権者として必要な資質・能力であると考えられる。

公共では「政治的主体となる私たち」「経済的主体となる私たち」「法的主体となる私たち」「様々な情報の発信・受信主体となる私たち」の4つ視点から、具体的な社会課題に対し解決のあり方を考える協働での授業が目指されている。例えば、選挙に際して政党や立候補者の政策を比較したり、消費者トラブル等に巻き込まれないように私たちがもつ権利を深く理解し適切に運用したりする学びである。このような学びを通して、複雑化した社会問題をしっかりと考えて議論し、自分たちの問題として考えていくような態度と資質を育てていく。

このような高等学校の公共の学びを展開するに当たり、小学校の社会科ではどのような力を身に付けることが必要であるか明確にしなければならない。このように他学校種の取り組みから学び、小学校社会科教育が、前後の学校種の教育活動とどのように関連するのか、またどのような系統の枠組みがあれば公民としての資質・能力につながる「社会形成力」の育成を図ることができるのか。次項の図は、中学校までの社会科の目標と見方・考え方の系統をまとめたものである。

【社会科の目標】

公民としての資質・能力の基礎を育成する

【中学校社会科の目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の育成を目指す。

【小学校校社会科の目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の育成を目指す。

- (1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

【生活科の目標】

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿】

- | | |
|----------------|-------------------|
| ① 健康な心と体 | ② 自立心 |
| ③ 協同性 | ④ 道徳性・規範意識の芽生え |
| ⑤ 社会生活と関わり | ⑥ 思考力の芽生え |
| ⑦ 自然との関わり・生命尊重 | ⑧ 量・図形、文字等への関心・感覚 |
| ⑨ 言葉による伝え合い | ⑩ 豊かな感性と表現 |

【社会科の目標のつながり】

【中学校社会科における社会的な見方・考え方】

【地理的分野 地理的な見方・考え方】

社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で人間の営みと関連付けること。

【歴史的分野 歴史的な見方・考え方】

社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で人間の営みと関連付けること。

【公民的分野 現代社会の見方・考え方】

社会的事象を政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること。

【小学校社会科における見方・考え方】

構想

社会に見られる課題について、
社会への関わり方を選択・判断する力

考察

社会的事象の特色や相互の関連、意味
を多角的に考察する力

位置や空間的な広がり
時期や時間の経過
事象や人々の相互関係など に着目して捉え、
比較・分類したり総合したり
地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること

【生活科における見方・考え方】

生活科における見方・考え方は、身近な生活に関わる見方・考え方であり、それは身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事。

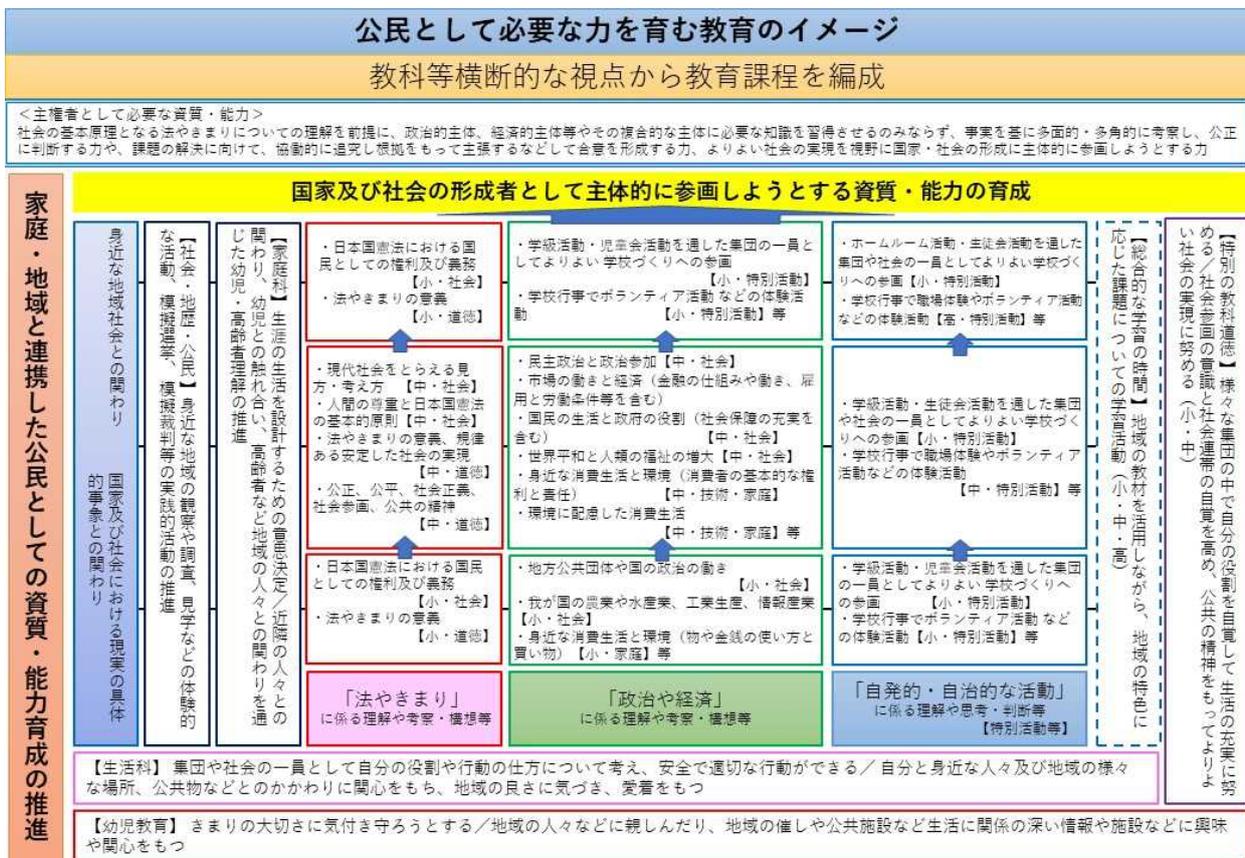
【幼児期における見方・考え方】

幼児教育における「見方・考え方」は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすること。また、このような「見方・考え方」は、遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友達と関わり、様々な体験をすることを通して広がったり、深まったりして、修正・変化し発展していくものである。こういった「見方・考え方」が幼稚園等における学びにつながるものである。

【社会的な見方・考え方の系統】

幼児期や低学年では身近な環境における遊びなどを通した直接体験から学びを深めていくことが求められている。その中で、諸感覚を働かせて、試行錯誤したり、思いを巡らせたりしながら、ものの見方・考え方を徐々に形成していく。小学校中学年以降は、教科の学びが色濃くなり、各教科での見方・考え方を繰り返し働かせ、育んでいく。社会科においても、社会的な見方・考え方を働かせ、考察（社会的な事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考察する力）や構想（社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断する力）の思考を繰り返すことで、公民としての資質・能力につながる社会形成力を育んでいくことが可能になるのではないかと考える。そして、このような学びの経験や育んだ資質・能力は、中学校以降の学びや育まれる資質・能力の基礎になり得ると考える。

このような学校種を越えた学びの見通しを意識し、公民として必要な資質・能力を育む教育のイメージを下図のように捉える。



【教科横断的な視点から教育課程を編成した際の公民として必要な力を育む教育のイメージ】

このように公民としての資質・能力を育む教育の全体像を捉えることまで意識しながら、小学校社会科で学ぶ学習内容を整理していくことが大切である。公民としての資質・能力を養うために、小学校段階では、社会の現状をしっかりと捉える（社会認識）ための社会的な見方・考え方を育むこと、そしてよりよい社会の形成に向けて考えたり、行動に移したりする学びの経験（社会参画）が大切であると考える。このような学びの過程を経て、公民としての資質・能力や社会形成力を育んでいけるような社会科学習の在り方を考えていく。そのために、社会に出た際にどのような概念が必要か（内容面）の検討や例えば社会的な事象に対して選択・判断する活動など、社会認識を社会参画につながる学習活動の在り方（方法面）の検討が必要である。

そこで、今回研究の方向性として「視点Ⅰ：内容値の側面から」「視点Ⅱ：主に学習論の側面から」「視点Ⅲ：主に実践知の側面から」という3つの視点を設定し、研究を深めていきたい。

4 研究の方向性

(1) 研究の視点（研究仮説）について

視点(研究仮説)Ⅰ…主に内容知(社会形成力を育成する内容の精選)の側面から

- ・ 地域学習、国土・産業学習、政治学習、歴史学習の内容を明らかにするとともに、そのための教材開発、学習材化を図る。子ども自らが価値ある問いをもち主体的に問題解決を図る過程で社会認識を深めることができれば、社会参画の基礎をはぐくむことができるだろう。

→ 社会形成力を育成するために必要な内容知及び教材開発・学習材化、価値ある問いの視点

社会科におけるすべての問いは、個人的であると同時に社会的である。すなわち個人にとって問われる問題は、社会という枠組みへ広げて捉えられるべき(社会的な見方・考え方)ものであり、逆に社会のもつ問題は個人レベルまで降ろさなければならない。そのための教材及び問いの分析が必要となる。

これまでの内容研究である地理的、歴史的、公民的見方・考え方と社会形成力につながる内容の関連性、幼稚園教育要領、学習指導要領をもとにした幼児期教育から生活科へ、そして生活科から社会科、中学校社会科へとつながる縦系列の内容分析をするとともに、社会形成力の視点から各教科書会社によって扱う事例、共通して見られる用語、主な学習活動、育てたい資質・能力等について教科書分析する。それらをもとに、どのような教材が考えられるか、またそれをどのように学習材化するか具体を明らかにしていく。

視点(研究仮説)Ⅱ…主に学習論(社会的な見方・考え方の深化)の側面から

- ・ 子ども自身が自己の学習状況をメタ認知(自己調整)する過程で、単元課題を解決する中で得た解釈を観点変更によって新たに社会的な見方・考え方を獲得したり、別事象を取り上げて自己のもつ社会的な見方・考え方を働かせたりする(再構成の学習)ことで、社会的な見方・考え方を深め、育てることができるだろう。

→ 社会的な見方・考え方を働かせた深い学び(学習意欲、指導の個別化・学習の個性化(個と協働学習)、思考操作と表現の重層化(ノート、板書)の視点

子ども自身が、自らの学び(過程と結果)の見通しをもち、主体的に問題解決を図る過程(自己調整の過程)で、思考操作(観点変更、転移・応用・発展)と表現の重層化(再構成の学習)及び指導と評価の統一を図り、言語活動の充実により、思考力・判断力・表現力の育成を目指すことが大切である。

これまでは、社会的な見方・考え方を主に平面的(2次元的)にみる(地理的・歴史的・公民的な視点から広くみる)ことによって、社会的見方・考え方の広がりには保障できた。今後、それを学習過程でどのように働かせるかという動的な視点を加えることによって、より構造的な社会的な見方・考え方が育つのではないかと考える。

社会的な見方・考え方を繰り返し働かせることで螺旋状に社会的な見方・考え方が深化・発展し社会に開かれた資質・能力としての社会形成力がどのように育成されるかが分かるようにする。

社会科学習では、固定化された静的な知識・技能を学ぶのではなく、子どもたちが大人になったときによりよい社会の形成者となるための生きて働く知識・技能を習得できるようにすることが重要である。

また、生きて働く知識・技能を習得できるように支援していくことで、一人一人の子どもの社会認識を深めることができる。観点変更や転移・応用・発展する学びでは、資料の提示や友だちとの学び合い、タブレット端末などを用いた新たな情報の取捨選択、様々な資料読解によって社会的な見方・考え方を活用して社会的な事象のもつ意味を読み取ったり、資料を通じて子ども一人一人がもつ既存の認識を揺さぶることで「自分なりの結論」を再吟味したり、改善したり、発展させたりして深い学びへとつなげることができる。その結果、社会的な見方や考え方が深い学びの創造につながるのではないかと考える。

以下に示すのは、深い学びの創造につながる学びのプロセス例である。

第1段階

- 問題をつかむ場面では、子どものもつ既習知識、既有経験等をもとに、本時、子どもが解決しようとする学習問題への見通しに対して「なぜそう思うのか」「何を根拠に考えたのか」と問いかけ、一人一人の子どもがもつ社会的な見方・考え方が明確になるようにする。

第2段階

- 学習の展開場面では、一人一人が習得した知識・技能をもとに個による調べ学習、話し合い活動(協働的な学び)を行い、子ども同士、また多様な他者との関係性の中で、前時までに習得した社会的な見方・考え方を深められるようにする。また、これまで身に付けた社会的な見方や考え方をを用いて、他の事例を取り上げて学習を進めていく(転移・応用)、さらには、別の観点から再構成する(観点変更)することで、社会的な見方・考え方を深め、広げていく。

第3段階

- 学習のまとめの場面では、単元を貫く学習問題に対する自分の考えを言葉や文章、図で表現したり、別の事例を取り上げて検証のための学習を行ったりしつつ、一人一人の社会参画への足かかりとする。

そのために知識構造図の中に、新たな社会的な見方・考え方がどのように位置付けられ、知識がどのように変容していくのか、また別の社会的な事象を取り上げて知識を更新する(再構成)ことによって、どのような社会的な見方・考え方が育まれるかを想定する。

視点(研究仮説)Ⅲ…主に実践知(教育課程を通して他教科や他領域、経験等との有機的な関連を図った実践的社会形成力の育成)の側面から

- 単元の学習内容が構造化された知識・技能として習得できれば、学習内容の定着性・応用性が高まり、社会認識が深まる。その過程で、他教科・領域と関連付けたり、既有経験、既習事項等と関連付けたりしながら探究活動を繰り返すことによって、実践的な社会形成力が身に付くだろう。
- 開かれた科学の論理と子どもの生活の論理及び一人一人の思考の道筋を互いに結合させることができれば、実践化につながる社会形成力が育成できるだろう。

→ 実践的な社会形成力育成への道筋の視点

一人一人の子どもが自分たちの問題を自分自身で考え、社会における意思決定に影響を及ぼすことが大切である。民主主義社会では、様々な価値観や多様性が認められている以上、構成員である私たちにとっては考えることが求められる。公民としては、自ら考え、判断するということが最も基本的な習慣でなければならないし、そのための考えるためのスキルを身に付けることが求められている。

教育課程全体を見通した大単元構想により、他教科(国語科、生活科、特別の教科道徳等)及び他領域(特別活動、総合的な学習の時間)との関連性を図ることによって、実践的社会形成力の育成を図る道筋を具体化する。例えば、地域の伝統行事への参加では、社会科での地域の伝統行事について学ぶ学習と道徳科での郷土を愛する心に関連付けて学び、それを総合的な学習の時間、家庭生活とつないで実践する過程等が考えられる。

(2) 資質・能力の育成について

小学校社会科のねらいは、公民としての資質・能力の基礎を養う教科である。グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な公民としての資質・能力の基

礎を養うことを目標に置いている。

公民としての資質・能力とは、「世の中が多くの人々の協力によって成り立っていること、一つの社会的事象を多面的に考えることが必要であること」等を学ぶことにより養われる。また「自分の意見を持ち、自己主張することの大切さを実感するとともに、他の意見を尊重したり、様々な角度から情報を収集し、自分の考えの背景を確かなものにしたりしていくことの重要性」を学んでいくことも大切である。

現代社会においては、公民としての資質・能力の減退が多くみられる。「私」が優先され「公」に魅力を感じない雰囲気が社会にある。その背景には、日本人は全体のバランスを意識するあまり個としての魅力に欠けていた部分がある。しかしながら、公民としての資質・能力が十分に育たないままに「私」ばかりを主張する風潮がみられる。「努力や苦勞を伴うことを避ける意識が強くなり楽な選択肢を選択する。」「人間関係では自分にとってプラスになる人間や考え方が合う人間とだけつきあいたいという人間関係を利己的に捉える傾向がある。」ことなどは、そのよい例である。

こうした現状だからこそ、社会的事象を多角的な視点から見て、問題解決に向けて多数の「私」の立場を発見できるようにしたい。また、自身の考えを相手に説明し、より多くの人が納得できるような個人的・集団的意思決定をしていく場を設定することが重要だと考える。

そこで、これからの社会科学習では、これまで香川県社会科教育研究会が提唱してきた事実認識、関係把握、本質把握という3層構造から一歩進んで、**現実的の把握及び解決思考に進む**ことが必要であると考える。

他の教科学習にはない、社会科として求められる価値とは、主に公民としての資質・能力の基礎の育成に関わる点であると考えられる。具体的には次のようなものが考えられる。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 平和主義、国民主権、基本的人権の尊重の原則にふさわしい国民になろうとする自覚② 自分たちが地域社会、国家の担い手であるという自覚とその発展に尽くそうという態度③ これらの自覚に基づく政治、経済などの豊かな教養を身に付けること④ 自由と権利、社会的責任、義務についての正しい認識をもつこと⑤ 確かな社会認識に基づいて、権利・義務の主体者として自主的に行動すること |
|--|

例えば、水を節約するために水を出しっ放しにしない、交通事故を防ぐためにガードレールをつけたらよいなどという安易な問題解決ではなく、将来の社会参画に向けて社会科学習で学んだこと（現実的の把握）をどのように生かして説明・提案するか、また自分なりの考えを社会に生かすためにどのように行動すればよいか考えること（解決思考）を通して、社会科に求められている価値の実現を図っていく。

(3) 学習論について

本来、社会的事象とは、様々な側面をもっている。そのため、社会的事象の本質に迫るためには、それを様々な角度から追究、考察することが求められる。そこで、多角的に事象を追究する学習を通して、多様な立場、視点から問題を解決する能力を育成していく学習論を目指す。

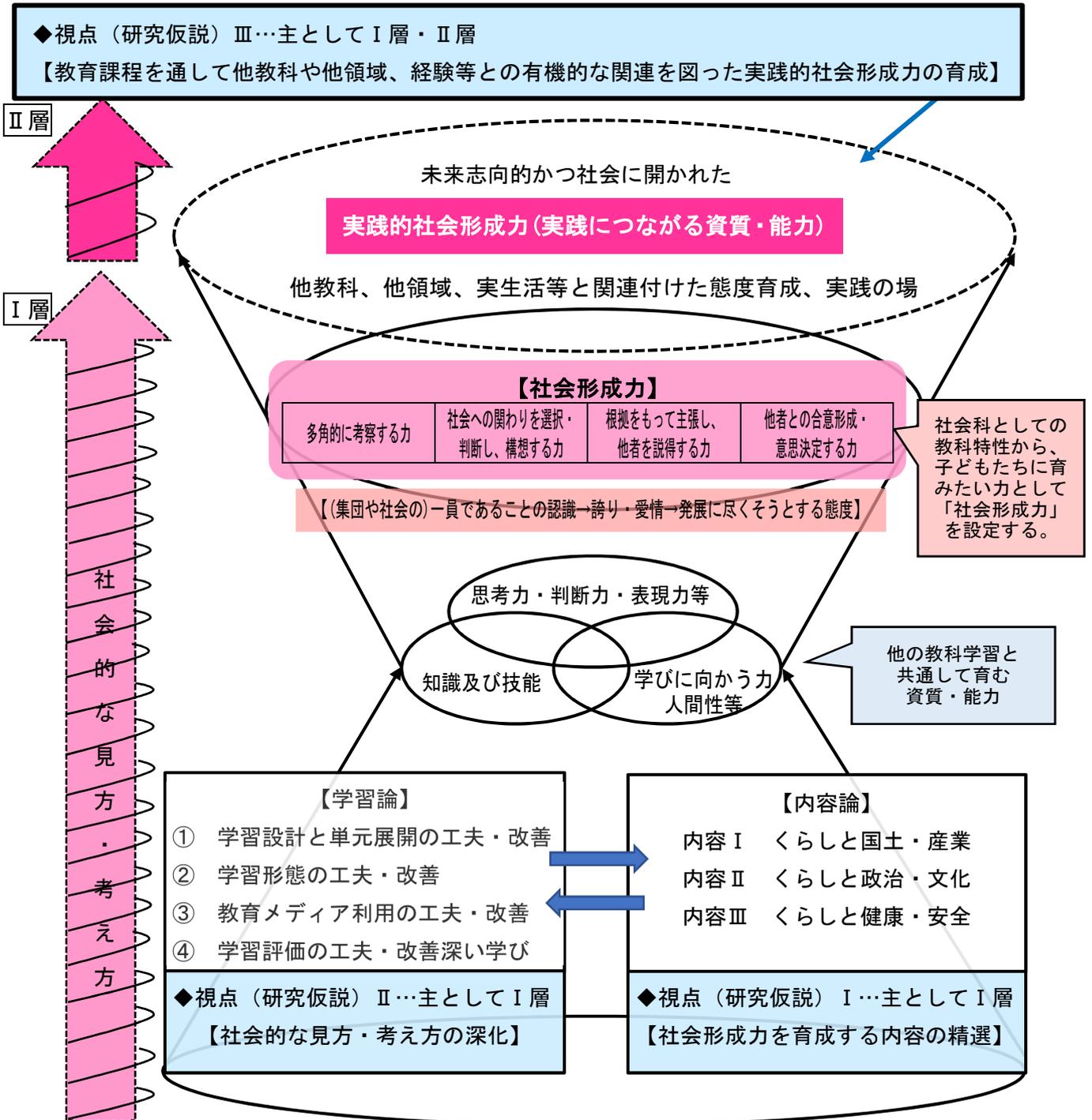
社会科で扱う問題は、答えが必ずしも一つに集約しない、解決せず将来にわたって追究し続けるようなオープンエンド、ゴールフリーな問題が多い。このような問題解決的な学習になればなるほど、個性の発揮を求め合う集団思考の場を設定していくことが大切になる。ここに協働的な学びの価値がある。

これまでの香社研の研究を踏襲しつつ、新しい方向性を示す内容として、次の4つの内容を考えた。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 学習設計と単元展開の工夫・改善<ul style="list-style-type: none">・ 事実認識→関係把握→本質把握→現実的の把握の過程における社会形成力の育成・ 社会的見方・考え方を働かせる思考操作と表現の重層化 ・ 自己調整学習 |
|--|

- ② 学習形態の工夫・改善
 - ・ 指導の個別化、学習の個性化（個と集団による協働的な学び）
 - ・ 教材反応学習、反応類型学習、課題選択学習等の学習類型
- ③ 教育メディア利用の工夫・改善
 - ・ ICTの効果的な利用
- ④ 学習評価の工夫・改善
 - ・ 自己評価、相互評価、他者評価

これらのことを踏まえ、今年度以降新たな研究の視点（研究仮説）として、次の3つの視点を設定したい。



【社会形成力、社会的な見方・考え方の関係と研究の視点】

(4) 学習指導要領社会科における目標と社会形成力の関係

小学校社会科では、研究構想図Ⅱ層における他教科、他領域、実生活、実社会との関連を図った実践的社会形成力育成までを視野に入れながら、その土台となるべき確かな社会認識の形成を図ることを大切にする。

つまり、地域や社会に参画することを志向しつつ、社会認識の形成を目的とする社会科の授業において、主体的な問題解決過程を通じて一人一人の児童の価値判断や意思決定、そして他者との対話を通じた合意形成を図っていくのである。これからの研究の在り方として「社会形成の視点」を教材開発や単元構想、1単位時間の学習指導に取り入れていく。

そのことを考えるにあたり、まず学習指導要領にみられる資質・能力と本研究で提唱している社会形成力の関係について考察しておく。

○ 社会科で育てたい資質・能力(思考力・判断力・表現力等)と社会形成力の関係

社会科を通じて

・社会的事象の①特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、②社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、③考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

3・4年生

社会的事象の①特色や相互の関連、意味を考える、②社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、③考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。

5・6年生

社会的事象の①特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、②社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、③考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。

※それぞれの①～④は、下の社会形成力の要素と関連があると考えられる。

○ 社会科で育てたい資質・能力(学びに向かう力、人間性等)と社会形成力の関係

社会科を通じて

・社会的事象について、②よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養う。

・①多角的な思考や理解を通して涵養される地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。

3・4年生

社会的事象について、②主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、④よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

5年生

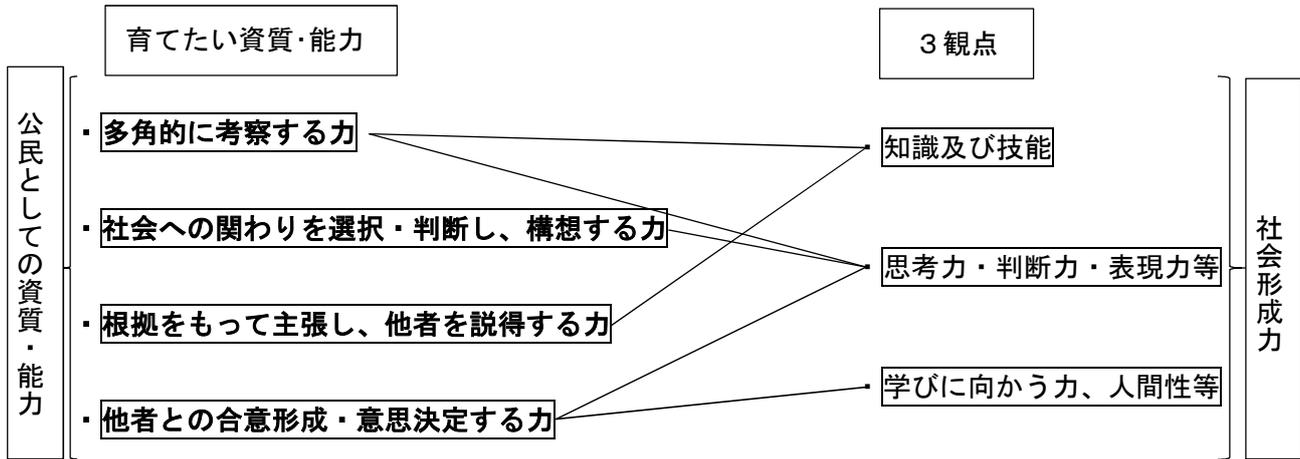
社会的事象について、②主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、④よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、①多角的な思考や理解を通して、我が国の国土に対する愛情、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

6年生

社会的事象について、②主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、④よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、①多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切に国を愛する心情、我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。

●社会形成力の要素

- ①多角的に考察する力、
- ②社会への関わりを選択・判断し、構想する力、
- ③根拠をもって主張し、他者を説得する力、
- ④他者との合意形成・意思決定する力



※よりよい**社会の形成**に参画する**資質や能力の基礎**
 =社会形成力とする。
 ※将来どのような社会をつくりたいかを考え、そのた
 めに行動する基礎的な資質・能力として
 ※四つの要素の統合概念としてとらえる。

5 研究内容

(1) 内容研究について

① 社会形成力を育てる地域学習

中学年社会科では、地域社会の一員としての意識の醸成を図る。家庭生活における個人意識から抜け出し、個人の力では解決できない衣食住の確保や人々の生命・安全・財産を守る働きなどの地域にかかわる諸問題について、その解決を図るために地域の人々がどのように組織をつくり、協力・連携を図っているかについて理解できるようにする。

また、「組織と自分」との関わりを通して、「私たちのまちには、いろいろな組織があり人々が安全に・健康に生活できるようにしている」ことについて理解できるようにする。このことが地域学習を通して学ぶべき重要なねらいの一つと考える。それが、高学年で培うべき公民としての資質・能力へとつながっていく。

また、能力の視点として「地域を観察する方法」を身に付けることを大切にしたい。地域の共同社会をどの視点から捉え、どのように観察し、組織・整理していくと正しく理解できるのか、その方法を身に付けることも必要である。例えば、地図活用の能力としての読図、描図の習熟、一間隔や距離感、方位、方向感覚や分布意識などの間隔を身に付けることが大切である。

ところで、社会科で取り上げる地域性とは、あくまでもそれぞれの学校における子どもの生活経験が基盤であり、生活経験との関連で捉える地域性でなければならない。次に示すのは、地域性をどう捉えるか、どう生かしていくかの視点等である。

◆ 地域性を生かす視点

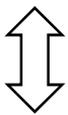
- ・ 地域における現実の姿を学習に活用することが、地域性を生かすことになる。地域性とは、その土地によって千差万別であり、教科書は一つの事例として学習の方法を示唆している。

◆ 地域性を捉える視点

- ・ 人間は一人では生きてはいけない存在である。個と個、個と集団、集団と集団などのかかわりの中で人々が作り出したものの恩恵を受け、人々が作った組織的活動に依存しながら自らもまた地域の組織の一員として協力する中で生計を営んでいる。
- ・ 地域の人々の生活や活動は昔から今に受け継がれ将来に向かって発展していくものであって、地域社会は絶えず変化し続けている。
- ・ 地域を理解するためには、一部の地域だけを学習するのではなく、時間的・空間的条件や地理的・歴史的条件下で広い視野から考えられるようにすることも大切である。

◆ 地域を理解するための基礎

- ・ 環境的基礎・・・地域環境は人間が必要とする場所を選んで生活している。地域社会は場所によって人の住む様子が違うということ。
- ・ 経済生活的基礎・・・人々は地域環境に働きかけて生活している地域は、生産や消費、廃棄物処理などで他地域と深く結びついている。
- ・ 社会関係的基礎・・・地域社会は、安全・健康を守るために協力体制をつくっている。地域社会には様々な機構や組織がある。
- ・ 文化発展的基礎・・・地域社会は人々の働きによって変化・形成されてきたものである。地域社会の開発は地域の人々の協力によるものである。
- ・ 政治的基礎・・・地域の人々の願いは多くの人や行政などと結びついて計画的・組織的に実現される。地域社会には歴史的・現実的に様々な課題があり、その解決には人々の努力や工夫がはらわれてきた。



- ・ 人間的統合・・・地域社会に関心をもち、地域活動に参加する地域社会の一員としての自覚と行動をする過程で価値を発見したり、意思決定したりする。

② 社会形成力を育てる国土理解・産業学習

高学年になると、主に社会を成立させている地理的条件と歴史的条件を分化させながら、ある程度深く追究していくようになる。そこで、事実に基づいた社会集団としての意識の育成を図る。国は、あくまでも自分を取り巻く社会の一つであり、一般的な国としてではなく、国という概念を産業、国土環境、歴史、政治といった窓口から具体的に理解し、その中に自分たちを位置付けていく活動をしかけていく。

5年生では日本の産業を中心に学習が進められるが、内容としては、農業、工業を中心に国土、貿易、交通などの内容を取り上げ、国土の特色とともに、そこで働く人々の姿や各地の有機的な交流などを具体的に理解していく。日本という国が、各産業を通して、どんなつながりやまとまりをもっているのかについてつかんでいくのである。

③ 社会形成力を育てる政治学習

政治単元では、現代社会を捉える見方・考え方の基礎を養うことをねらいとする。若年層の政治への無関心、投票率の低下等が著しい現状、選挙権が18歳に引き下げられる等の改革が行われる中で、学習指導要領の改善の視点に挙げられているように、政治への関心を高める必要がある。

人は、家族、学校、地域の自治会、職場など様々な集団を形成してそこに所属し、協力してよりよい生活を営む努力をしていることに着目する。それぞれの集団内では、一人一人が平等な人間として尊重され、それを基盤に社会生活が営まれている。有効に機能する仕組みとして、政治がある。政治は、決して大人の世界だけのものではなく、学校、学級の中にも、様々な政治の仕組みが機能している。

これらのことを踏まえて、社会的存在である人間が行動する政治的・経済的活動などを捉え説明するための概念的な枠組みである見方・考え方の基礎を養うことをねらいとする。その際には、社会生活に見られる具体的な事例等を取り上げて多角的・具体的に考えるなどの工夫が必要である。

④ 社会形成力を育てる歴史学習

歴史学習は、歴史的事象を子ども自らが認識の対象にすることであり、歴史という直接経験できない間接的認識であること、その価値判断、解釈などを通して認識が成立することという特質がある。

歴史教育では、以下のことをねらいとする

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| ・ 変化への認識を育てる | ・ 歴史の進展における人間の役割への認識を深める |
| ・ 集団の一員としての連帯感を高める | ・ 意思決定の力を高め参加意欲を高める |

社会科は、社会認識を通して子どもたちに生きて働く知識を習得する。社会科の中で学ぶ歴史が、ある時代のある人物にだけ通用する認識（知識）としてではなく、ある時代のある人物の行動を通して、学んだことが社会認識として現代の生活の中に通用するものとして捉えられなければならない。人間の行動の根底にある命題を基盤として、それをもとに歴史的事象に対する社会認識が子どもたちに形成されることが大切である。

(2) 社会形成力を育む社会科カリキュラム全体構想案

以上のような、社会系教科学習の内容の系統性とこれからの持続可能な社会の形成者として認識すべき学習内容の分析から、社会形成力を育む社会科カリキュラムの全体構想として3つの内容のまとまりを設定した。

- 内容Ⅰ・・・くらしと国土・産業 「持続可能な社会」の創り手を育てるために**
内容Ⅱ・・・くらしと政治・文化 私たちの「伝統・文化」を守り、受け継ぐために
内容Ⅲ・・・くらしと健康・安全 私たちの「いのち」と「くらし」を守るために

この視点は、中学校での地理・歴史・公民との接続を意識しつつ、小学校段階での学びの内容を整理し、学びの連続性や接続を意識して、単元を整理したものである。また、教科等横断的な学びを展開することも想定し、総合的な学習の時間との接続や、今後求められるであろう、主権者としての資質・能力を育むことを想定した単元構想も併記して提案する。

内容Ⅰ くらしと国土・産業…「持続可能な社会」の創り手を育てるために

～くらしの中で、持続可能な国土環境（自然環境・社会環境）保全、資源の活用を図る人づくり～

内容Ⅰの特色は、地域・国土理解である。内容構成として、学習指導要領で述べられている「持続可能な社会の創り手」を育てるための構成概念として、「多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任制」等を想定している。くらし（経済）という視点から、自然環境に適応してくらしを営んでいるという概念のスパイラルを意識して学習を展開することで、国土環境（自然環境・社会環境）保全、資源の活用の視点から学びを深める子どもたちを育て、中学校での地理分野との接続を図る教材及び単元を構想する。

内容Ⅱ 「くらしと政治・文化」…私たちの「伝統・文化」を守り、受け継ぐために

～国際社会、国家、地域社会の一員としての自覚と責任をもち、行動できる人づくり～

内容Ⅱの特色は、政治及び国際理解、歴史理解である。特に、6年生では、これまで歴史先習の年間指導計画から政治先習に変わった。このことは、歴史学習においても、それぞれの時代における世の中の仕組みや人々の生き方を学んだり、今の時代と比較したりしながら、歴史を点の学びではなく、線や面の学びとして学習を展開することが求められている。また、歴史学習を学んだ後に、再度、公民学習である国際理解教育についても学習の系統をつないでいる。このような学びを展開することで、国際社会、国家、地域社会の一員としての自覚と責任をもち、過去・現在そして未来を考察・構想する単元および学習を展開し、中学校歴史分野との接続を図る教材及び、単元を構想する。

内容Ⅲ 「くらしと健康・安全」…私たちの「いのち」と「くらし」を守るために

～住みよいくらし（健康・安全）づくりに参画できる人づくり～

内容Ⅲの特色は、現代的な諸課題に対する最適解を考えることが中心となる。自然災害・健康的な生活を営むための関係機関の連携や、災害からくらしを守る視点としての、自助・共助・公助の考えをより具体的な社会的事象を通して理解する。また、これらの学びを通して、主権者としての選択・判断する場面において、18歳選挙権を行使したり、自らの意思で、公民として適切に選択・判断して投票したりする姿を想定する。このような学びを展開することで、住みよいくらし（健康・安全）づくりに参画できる資質・能力を育成しつつ中学校公民分野との接続を図る教材及び、単元を構想する。

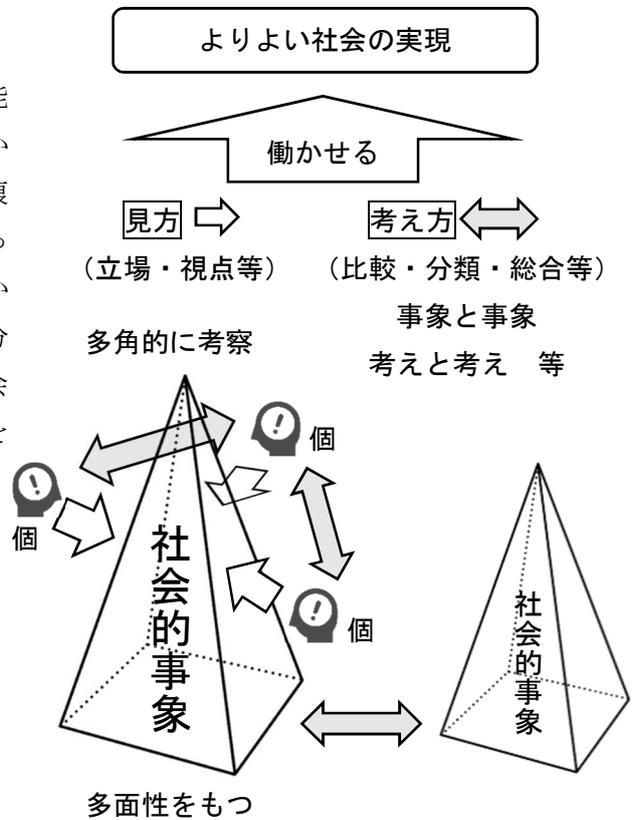
(3) 社会科カリキュラム全体構想で育てたい「社会形成力につながる資質・能力」

単元、または本時において、社会形成力につながる具体的な4つの資質・能力を育成することを大切にす。これら4つの資質・能力がバランスよく育まれるように、単元構成や年間計画に位置付けていく。また、このような資質・能力のイメージを共有できるよう、以下のような図で表す。

① 多角的に考察する力

多角的に考察する力とは、公民としての資質・能力である「広い視野に立ち」という小学校社会科から中学校社会科への接続・発展を意図している。複雑に組み合わさっている、いわゆる多面性をもっている社会的事象を、社会的な見方・考え方を働かせて、その多面的な側面を多角的に考察(比較・分類・総合等)し、社会のあるべき姿、よりよい社会形成に向けて、自分なりに構想するための根拠を見出す力のことである。

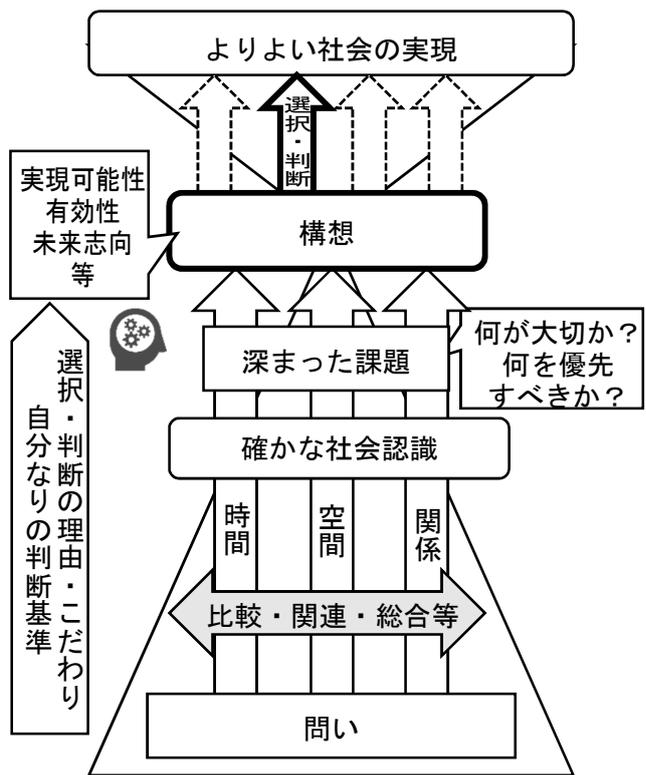
また、児童自らが自己の考えの一面性に気づき、その社会事象には他の立場からみた考え方もあることを認識し、その後、自己の考えを修正・再構成することで、児童の思考を深めることができる。このような過程を工夫することで、社会的事象の意味を多角的に考えることができると考える。



② 社会への関わりを選択・判断し、構想する力

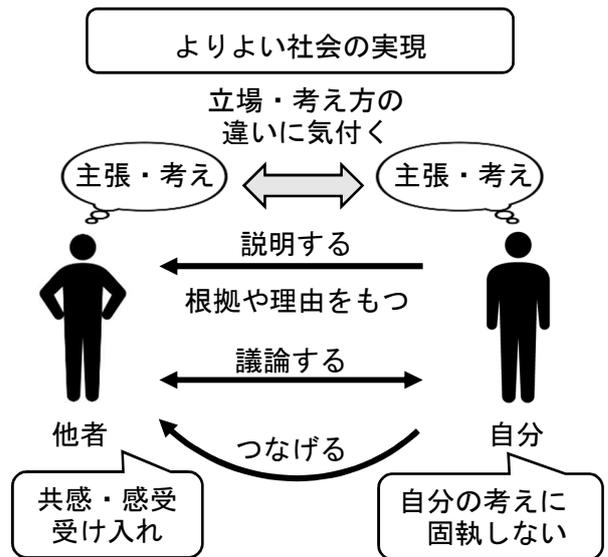
公民的資質の基礎を養うことを目標とする小学校社会科においては、実際に参加するという行動だけでなく、目的や理由によって自らの行動を選択・判断したり、社会のあるべき姿を構想したりする力を養う必要がある。

社会への関わりを選択・判断し、構想する力とは、社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分たちに協力できることを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして判断することである。また、事実を学んだ上で、私たちはどうすればよいか、何を優先すべきかなどの問い(深まった課題)を設け、自分たちの立場を踏まえ、自分にできることを考えたり、事象の新たな価値や意味を見出したり、よりよい社会の在り方を考えたりする力である。



③ 根拠をもって主張し、他者を説得する力

根拠をもって主張し、他者を説得する力とは、考えたことや選択・判断したことを説明する力、議論する力のことである。説明するとは、根拠や理由を明確にして、調べて理解したことやそれに対する自分の考えなどを論理的に説明すること。また議論する力とは、互いに自分の主張を論じ合うことであり、自己の主張に固執するのではなく、他者の主張につなげたり、互いの立場や根拠を明確にして討論したりして、自分の考えを主張すること、つまり他者を説得する力のことである。

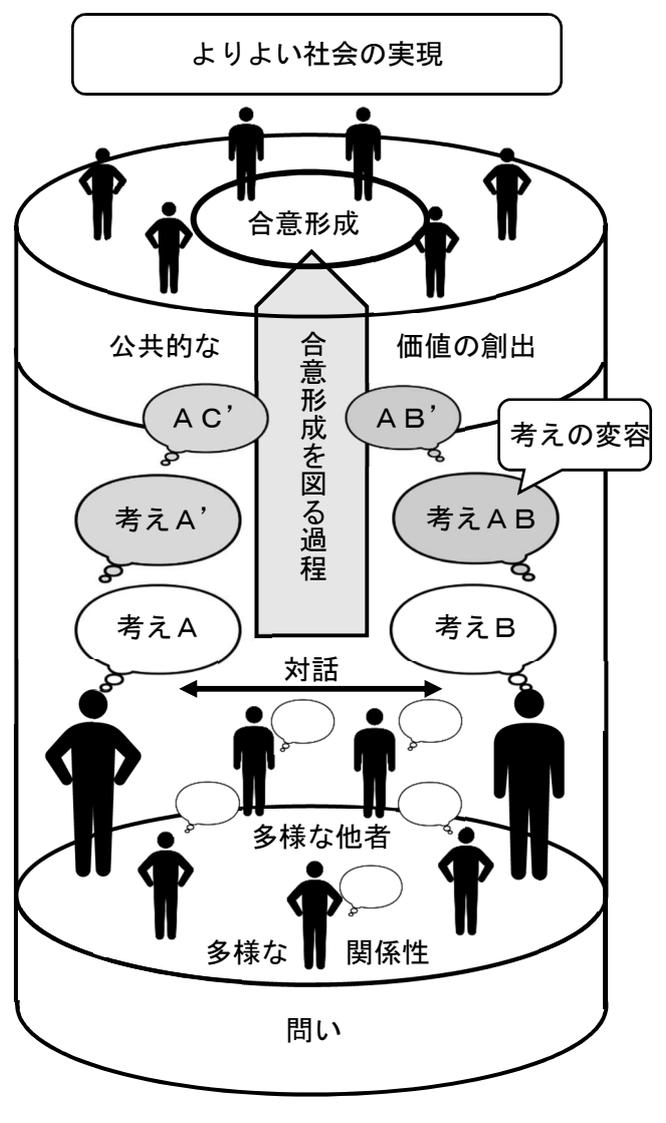


④ 他者との合意形成・意思決定する力

私たちの社会生活は、常に多様な他者との合意形成の上に成り立っている。様々な立場での意見を尊重しつつ、折り合いをつけたりしながら、いかに合意形成を図るか、その資質・能力の育成が重要であるといえる。また、合意形成を図った結果、始めの考えよりもよりよいものが生まれたという実感や経験を得ることも重要である。

また、多様な他者との合意形成によって、より「公共性」の高い考えや価値を創出することができる。小学生という発達段階において、児童の考えを主観的なものから「公共性」のある考えを持つことができるよう他者との対話や、考えの交流が大切である。

このように合意形成を図る過程により、社会形成の観点から、公共的な価値の創出も可能となり、社会的事象の意味をより客観的に捉えることができる。そして、他者との交流・対話は、自己の思考・判断を別の視点から見直すことにつながり、まさに、再構成の学びの実現には不可欠な資質・能力であるといえる。



こうした社会科で育てたい4つの資質・能力の上に立って、他教科、他領域等と関連を図りつつ、実社会、実生活の場面で資質・能力を生かすことで社会形成力を育成できると考える。

(4)令和4年度版 香社研版 ※実践事例は附属高松小学校の社会科の創造活動の実践より

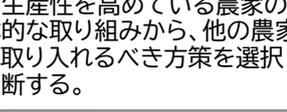
社会形成力を育む社会科カリキュラム全体構想案

目標		学校	それぞれの学校が設定する育てたい資質・能力		
		教科	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
		単元	多角的に考察し、 構想する力	社会への関わり方を 選択・判断する力	根拠をもって主張し、 他者を説得する力
年	領域	内容Ⅰ 暮らしと国土・産業	内容Ⅱ 暮らしと政治・文化	内容Ⅲ 暮らしと健康・安全	
第3学年	地域	わたしのまち みんなのまち ■学校のまわり ■高松市のようす はたらく人とわたしたちの暮らし ■農家の仕事／工場の仕事 ■店ではたらく人	高松市と人々の暮らしのうつりかわり	くらしを守る ■火事からくらしを守る ■事故や事件からくらしを守る	
		わたしたちの県 ■日本地図を広げて ■香川県の広がり 特色ある地域と人々の暮らし ■国際交流が盛んな直島町 ■うちわをつくるまち・丸亀 ■自然を生かしたまちづくり三豊市	きょう土の伝統・文化と先人たち ■残したいもの 伝えたいもの ■ふるさとの発展につくした人	住みよいくらしをつくる ■水はどこから ■ごみのしよりと利用	
第4学年	学習	わたしたちの国土 ■世界の中の国土 ■国土の地形の特色 ■低い土地のくらし／高い土地のくらし ■国土の気候の特色 ■あたたかい土地のくらし／寒い土地のくらし わたしたちの生活と食料生産 ■くらしを支える食料生産 ■米づくりのさかんな地域 ■水産業の盛んな地域 ■これからの食料生産とわたしたち わたしたちの生活と工業生産 ■くらしを支える工業生産 ■自動車をつくる工業 ■工業生産を支える輸送と買 ■これからの工業生産とわたしたち 情報化した社会と産業の発展 ■情報産業とわたしたちのくらし ■情報を生かす産業 ■情報を生かすわたしたち わたしたちの生活と環境 ■わたしたちの生活と森林	わたしたちの生活と政治 ■わたしたちのくらしと日本国憲法 ■国の政治のしくみと選挙 日本の歴史 世界のの中の日本 ■世界の未来と日本の役割	わたしたちの生活と環境 ■自然災害を防ぐ ■環境を守るわたしたち	
		世界のの中の日本 ■日本とつながりの深い国々	世界のの中の日本 ■世界の未来と日本の役割		
第5学年	国土・産業学習	わたしたちの生活と政治 ■わたしたちのくらしと日本国憲法 ■国の政治のしくみと選挙 日本の歴史 世界のの中の日本 ■世界の未来と日本の役割	わたしたちの生活と政治 ■子育て支援の願いを実現する政治／ 震災復興の願いを実現する政治		
		世界のの中の日本 ■日本とつながりの深い国々	世界のの中の日本 ■世界の未来と日本の役割		
第6学年	政治・歴史学習	世界のの中の日本 ■日本とつながりの深い国々	世界のの中の日本 ■世界の未来と日本の役割		

中学校社会科へつなぐ

□内容Ⅰ 「くらしと国土」・・・「持続可能な社会」の創り手を育てるために

～くらしの中で、持続可能な国土環境(自然環境・社会環境)保全、資源の活用を図る人づくり～

	内容Ⅰ くらしと国土・産業	社会形成力へつなぐ	実践的社会形成力を育むための他教科等や実社会・実生活とのつながり
第3学年	<p>わたしのまち みんなのまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ■学校のまわり ■高松市のように <p>はたらく人とわたしたちのくらし</p> <ul style="list-style-type: none"> ■農家の仕事/工場の仕事 ■店ではたらく人 	<p>■わたしたちのまちと高松市 高松市について人口、交通、地形、土地利用、古くから残る建物などの視点で考察したことをもとに、高松市のよさが伝わるサイクリングコースを構想発信する。(R1実践)</p> <p>■農家のしごと これからの農業は、様々な人と協力しながら、生産者と消費者がつながり、安定して稼げる仕組みを整えていることを、複数の取り組みから考察し、これからの農家の在り方を構想する。(R2実践)</p> 	<p>●緑3組 インテリアコーディネーター 新店舗のコーディネートプロジェクト</p> <p>●白3組 空き家ミッション 高松市の空き家問題解決プロジェクト</p> <p>●白5組 さめきに光をともし隊 さめき提灯を活用し地域活性化プロジェクト</p> <p>●赤4組 きらきらカレンダー 魅力を発信するカレンダーで地域を盛り上げるプロジェクト</p>
第4学年	<p>わたしたちの県</p> <ul style="list-style-type: none"> ■日本地図を広げて ■香川県の広がり <p>特色ある地域と人々のくらし</p> <ul style="list-style-type: none"> ■国際交流が盛んな直島町 ■うちわをつくるまち・丸亀 ■自然を生かしたまちづくり三豊市 	<p>生産性を高めている農家の具体的な取り組みから、他の農家も取り入れるべき方策を選択・判断する。</p> <p>■香川県の特色あるまちづくり 県内の特色ある地域のまちづくりのようすを多角的に考察し、移住希望者に伝える地域の魅力を選択・判断し、ランキング等に表現し実際に提案する。(R2実践)</p> 	<p>海の近くにある「うみまち商店街」を訪れ、商店街のすてきを探し、カレンダーを作成して、地域に配布します。</p> <p>●緑4組 3SEA スマイルカンパニー 香川の海の魅力を発信するプロジェクト</p>
第5学年	<p>わたしたちの国土</p> <ul style="list-style-type: none"> ■世界の中の国土 ■国土の地形の特色 ■低い・高い土地のくらし ■国土の気候の特色 ■あたたかい土地のくらし/寒い土地のくらし <p>わたしたちの生活と食料生産</p> <ul style="list-style-type: none"> ■くらしを支える食料生産 ■米づくりのさかんな地域 ■水産業の盛んな地域 ■これからの食料生産とわたしたち <p>わたしたちの生活と工業生産</p> <ul style="list-style-type: none"> ■くらしを支える工業生産 ■自動車をつくる工業 ■工業生産を支える輸送と貿易 ■これからの工業生産とわたしたち <p>情報化した社会と産業の発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ■情報産業とわたしたちのくらし ■情報を生かす産業 ■情報を生かすわたしたち <p>わたしたちの生活と環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ■わたしたちの生活と森林 	<p>香川県地域活力推進課の方に、作成したPR動画を発信しました。</p> <p>■あたたかい土地のくらし 人々は、国土の自然環境に適應(生かす・克服する)しながら、生活を営んでいることを、自分たちが住む高松市、沖縄県、岐阜県の事例を比較することで捉え、根拠をもって説明する。(R3実践)</p> 	<p>実際に県内の海岸を訪れ、生き物や植物、景観の魅力を調べ、まとめています。</p> <p>●赤5組 みんな幸せ 赤5 IT研究所 NTT ドコモや香川大学との連携により、情報の活用方法や情報格差をなくす取り組みを考え、提案するプロジェクト</p>
第6学年	<p>世界の中の日本</p> <ul style="list-style-type: none"> ■日本とつながりの深い国々 <p>世界の中の日本</p> <ul style="list-style-type: none"> ■世界の未来と日本の役割 	<p>■世界の未来と日本の役割(R3実践予定) 青年海外協力隊の方との交流を通して、日本が担うべき国際協力の在り方について選択・判断すると共に、今後、国際社会で日本人として必要な力・考え方を構想することができる。</p>	<p>高齢者が安心して暮らせるための情報活用方法について、現在模索中です。</p> 

中学校社会科へつなぐ

□内容Ⅱ 「くらしと政治・文化」…私たちの「伝統・文化」を守り、受け継ぐために
 ～国際社会、国家、地域社会の一員としての自覚と責任をもち、行動できる人づくり～

	内容Ⅱ くらしと政治・文化	社会形成力へつなぐ	実践的社会形成力を育むための他教科等や実社会・実生活とのつながり
第3学年	<p>高松市と人々のくらしのうつりかわり</p>	 <p>高松市の移り変わりや高松市が抱える課題を捉え、今後の市の在り方について構想する。</p> <p>■ 高松市のうつりかわり 高松市の移り変わりや市が抱える課題について多角的に考察し、今後の高松市のよりよい在り方について、構想する。(H29実践)(R3 実践予定)</p>	 <p>中心市街地の人口減少による空き家問題に対して、自分たちができることを考えます。</p> <p>●白3組 空き家ミッション 高松市の空き家問題解決プロジェクト</p>
第4学年	<p>きょう土の伝統・文化と先人たち</p> <p>■ 残したいもの 伝えたいもの ■ ふるさとの発展につくした人</p>	<p>■ ふるさとの発展につくした人 郷土の偉人「中野武彦」のまちづくりについて、先人の思いや願い、計画性といった視点から考察し、政治に関わる人々の思いや願いに共感し、自分たちの生き方・あり方を構想することができる。 (R3 実践予定)</p>	<p>●赤2組 KU MI KO Z 高松市の伝統工芸組手細工の魅力をPRするプロジェクト</p>  <p>組手細工の職人さんとながり、PRにつながる組手のデザインや商品を考案します。</p> <p>●白5組 さぬきに光をともし隊 さぬき提灯を活用し地域活性化プロジェクト</p>
第5学年			
第6学年	<p>わたしたちの生活と政治</p> <p>■ わたしたちのくらしと日本国憲法 ■ 国の政治のしくみと選挙</p> <p>↓</p> <p>日本の歴史</p> <p>↓</p> <p>世界の中の日本</p> <p>■ 世界の未来と日本の役割</p>		<p>さぬき提灯を広めるために活動している香川大学の学生サークル TERASU と協同でさぬき提灯を作成しました。</p>

中学校社会科へつなぐ

□内容Ⅲ 「くらしと健康・安全」・・・私たちの「いのち」と「くらし」を守るために
 ～住みよいくらし(健康・安全)づくりに参画できる人づくり～

	内容Ⅲ くらしと健康・安全	社会形成力へつなぐ	実践的社会形成力を育むための他教科等や実社会・実生活とのつながり
第3学年	<p>くらしを守る</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 火事からくらしを守る ■ 事故や事件からくらしを守る 	<p>研究の視点Ⅲ P33の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 地域の安全を守る(消防) 火事が発生した際の関係機関の対処の様子を捉え、今後火事による被害を減らすために有効な取り組みはどれか、今後の市の取り組みや自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。(R3 実践) 	<p>● 白2組(R2)いのちをまもるくん 自分たちのいのちを守るためにできることを考え、実行するプロジェクト</p>  <p>学校防災アドバイザーや防災士の方と一緒に、学校の避難訓練を改善し、実行しました。</p>
第4学年	<p>住みよいくらしをつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 水はどこから ■ ごみのしよりと利用 	<ul style="list-style-type: none"> ■ わたしたちのくらしを支える事業(水) 椛川ダム建設の価値を選択・判断する活動を通して、公共事業の意味や、公共事業は計画的に行われていることを理解する。(R3実践)  <p>市民にとっての椛川ダムの価値について吟味し、公共事業のよりよい在り方を捉えていきました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自然災害からくらしを守る 香川県の風水害の事例から、人々を守る関係機関の働きを捉え、災害時に自分たちがとるべき行動を選択・判断する。(R1 実践) 	 <p>ビニールシートと支柱のみでのテント作り。自助の大切さを、体験を通じて学びました。</p> <p>● 赤5組 自然とふれあうサバイバル体験 災害時や遭難時に自分の命を守るための方法を体験を通じて身に付けていくプロジェクト。</p>
第5学年	<p>わたしたちの生活と環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自然災害を防ぐ ■ 環境を守るわたしたち 	 <p>災害行動メモ「みまも～る」をよりよいものにするため、どんな内容を追加すべきか話し合いました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ わたしたちの生活と環境 自然災害による被害を減らすために有効な取り組みはどれか、今後の市や県の取り組み、自分たちが考えたアイデアから選択・判断する。 	<p>● 白1組 五色台白1ワールド 五色台の自然環境を様々な体験を通して学び、五色台の活用方法を提案する。</p>  <p>五色台を訪れ、自然を体感するアクティビティを通して、自然の魅力を肌で感じました。</p>
第6学年	<p>わたしたちの生活と政治</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 子育て支援の願いを実現する政治／震災復興の願いを実現する政治 <p>世界の中の日本</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 世界の未来と日本の役割 	<ul style="list-style-type: none"> ■ わたしたちのくらしと政治 (震災復興の願いを実現する政治) 	

中学校社会科へつなぐ

視点(研究仮説)Ⅱ…主に学習論(社会的な見方・考え方の深化)の側面から

社会的な見方・考え方を繰り返し働かせ、見方・考え方を育む学習過程や学習活動の在り方を明らかにする。

(1) 生きて働く知識を獲得する過程で社会的な見方・考え方を働かせる

社会科学習では、固定化された静的な知識・技能を学ぶのではなく、子どもたちが大人になったときに、よりよい社会の形成者となるための生きて働く知識・技能を習得できるようにすることが重要である。特に、生きて働く知識とは、より汎用的で応用性のある知識である概念的知識を用いて「何ができるか」や、それらを「どう使うか」にまで考えを発展させ、様々な課題解決を図ったり、学んだことを生活に役立てたりできるような「知識」である。例えば、第5学年の産業学習で獲得した「これからは持続可能な社会づくりが求められる」という知識は、今後子どもたちが生きていく中で直面する様々な課題において、その解決を図るための一助になると考えられる。このような知識が社会科学習の中で閉じるのではなく、子どもたちが生きていく中で実際に活用できるような、「生きて働く知識」にまで質的に高めることで、子どもたちは将来、よりよい社会を形成するために学んだことを生かすことができるようになるだろう。

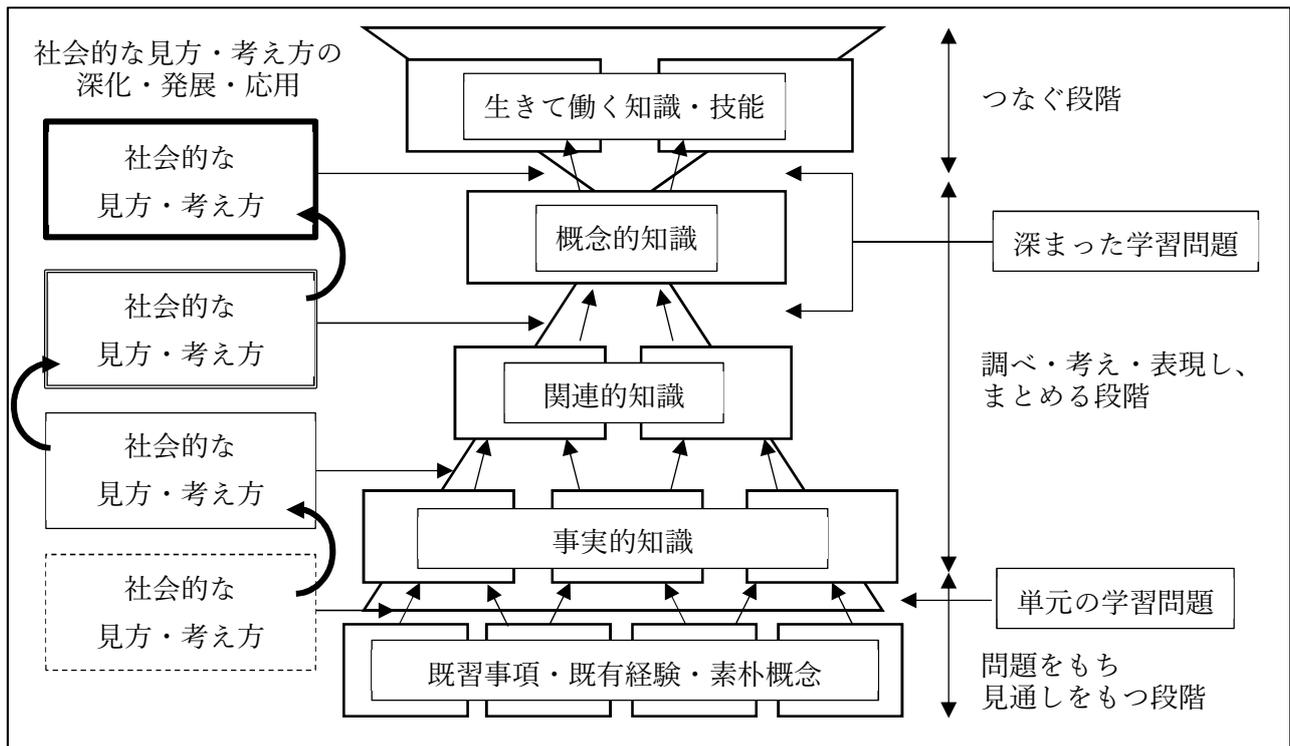
このような、生きて働く知識の獲得のために重要なことは、子どもたち自身が知識を獲得していくことである。つまり、子どもたちが知識を獲得する学習過程(プロセス)が社会科学習の中に組み込まれることが求められる。教師から教えられた知識ではなく、子どもたちが自ら体験したり、調べたりして得られた知識を「社会的な見方・考え方」を働かせることによって、複数の知識を比較・関連・総合させてより汎用的な概念的知識として形成していくことで実感を伴った知識になっていく。さらに、獲得した概念的知識を実際に活用し選択・判断する場面を設定したり、集団での吟味により再構成したりする過程を経ることで、真に生きて働く知識として質が高まっていくだろう。

(2) 社会的な見方・考え方を働かせる学習過程や支援と知の構造化

生きて働く知識として知識の質を高めるため欠かせないことは、「社会的な見方・考え方」を働かせ、知識と知識をつなぎながら「問い」を追究するような学習過程であり、いわゆる「深い学び」の実現である。そこで、子ども自身が自らの学びの見通しをもち、主体的に問題解決を図る学習過程を大きく3段階に分け、それぞれの学習過程において、社会的な見方・考え方を働かせ、深い学びを実現するための具体的な学習過程や学習活動の在り方を探っていく。単元や内容のまとまりの学習の中で、問いの解決のために、何度も社会的な見方・考え方を繰り返し働かせ、単元の始めに子どもたちがもっていた見方・考え方がより深化し、発展するような学習過程の在り方を探る。

これまでの研究により、確かな社会認識を育む問題解決的な学習に加えて、子どもたちが自ら社会に参画しようとする生き方を育む実践的な学習も含んだ問題解決的実践学習という学習論のもとで、実践を積んできた。問題解決的実践学習は①問題をもち、見通しをもつ段階、②調べ、考え、表現し、まとめる段階、③つなぐ段階の3段階で単元を構成している。問題をもち、見通しをもつ段階で子どもたちとともに学習問題をつくり主体的な学習となるようにし、調べ、考え、表現し、まとめる段階では単元の山場で深まった課題をつくり、思考操作を伴う対話を通して概念を深め、つなぐ段階でそれまでの学習を生かして社会につないでいくことで、社会に参画する資質・能力の基礎を養っていくことを目指している。

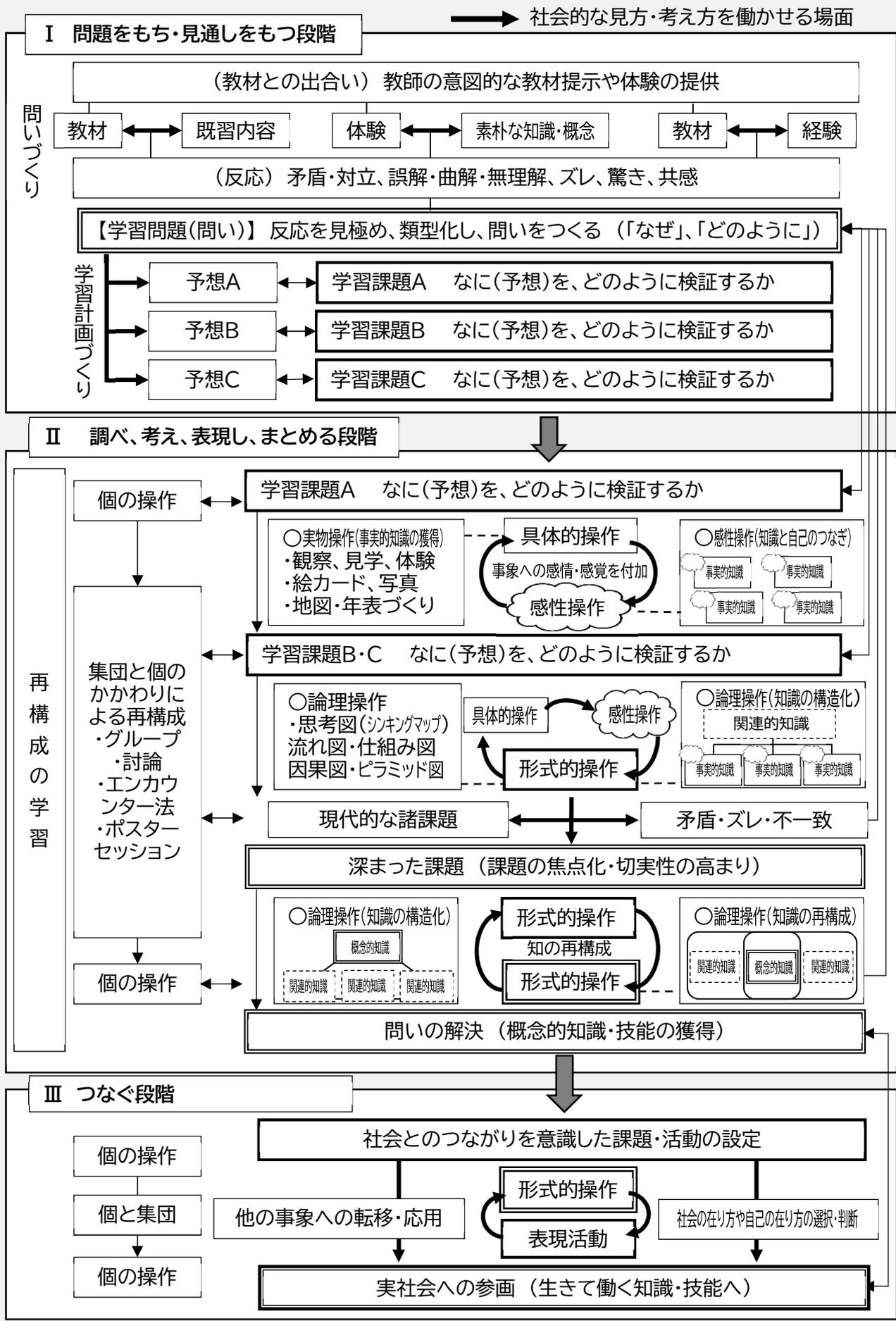
方策Ⅰ 授業づくりの段階 知の構造化（知識の構造図づくり）



教師は授業づくりの段階において、既有的知識（学習内容）が、どのようにして社会的な見方・考え方を働かせるかによって概念的知識へと質が高まっていくのかを想定しておく必要がある。そのために、教材研究や教科書分析によって得られたことを、知の構造図としてまとめていく。これにより、単元の本質を見極め、社会的な見方・考え方を働かせる場面を想定することができる。

まず、単元までの子どもたちの既習知識や学級の実態に応じた既有経験を整理し、単元の問いづくりや学習計画づくりに生かしていく。次に、階層ごとに知識を整理していく。教材研究や教科書分析により見出した内容をまとまりごとに、整理していく。はじめは具体的な事実に関する「具体的知識」から、具体的な知識同士が社会的な見方・考え方によって結びつけられ「関連的知識」に質的に高まっていく。そして、関連的知識が結びつき「概念的知識」として、子どもたちが獲得していく過程を想定する。さらに、深まった問いや選択判断を問う活動などを通じて、概念的知識を活用したり、再構成したりして生きて働く知識に質的転換を図っていく。このような知識の質的な高まりを整理・想定しておくことが、実際の子どもたちの学習のストーリー（単元構想）の土台となり、本質的な学びを保障することにつながる。

特に、生きて働く知識・技能を獲得するためには、どのような支援が有効であるか、実践と子どもの姿から検証していく。特に、社会的な見方・考え方を働かせ知識の質を高めていくような単元の山場では、子どもたちの見方・考え方の「観点変更」や知識を「転移・応用・発展」する学びや支援が有効であると考えられる。そのために、資料の提示の工夫や友だちとの学び合い、タブレット端末などを用いた新たな情報の取捨選択、多様な資料読解による多面的な社会的事象の分析、資料を通じた既存の認識の揺さぶりなどの具体的な支援が考えられる。このような支援を行うことで、再度子どもたちは社会的な見方・考え方を働かせ、「自分なりの結論」を再吟味したり、改善させたりして深い学びへとつなげることができる。その結果、社会的な見方や考え方が深化・発展することにつながる。と考える。



方策Ⅱ 社会的な見方・考え方を働かせる学びの過程を明らかにする

I 問題をもち・見通しをもつ段階

① 単元の本質的な学習内容の獲得につながる「問い」を設定する

教師は、子どもたちの実態を把握し、提示する資料や実際に問いかける発問を十分に吟味し、子どもたちの反応を緻密に想定しておく。本質的な学びを保障するためにも、この問いを立てる本段階は、非常に重要な段階であることを教師は認識しておきたい。

② 問いに対する現段階の予想を話し合い、その予想から「学習計画」をつくる

既有知識や社会的な見方・考え方を働かせ、問いに対する予想をする。その結果、これまでの知識で転移・応用できそうなことが見えてきたり、実際に調べないと分からないことに気付いたりする。つまり、問題解決に対して必要なもの（知識）や活動が見えてくる。「きっと〇〇だろう。」という予想を、「〇〇のようすを調べて予想を確かめよう。」という具体的な学習課題や小さな問いに変換し、それらを並び替えて学習計画をつくることで、見通しをもつことにつなげていく。

II 調べ、考え、表現し、まとめる段階

多様な他者との関係性の中で、これまでに育んできた社会的な見方や考え方を働かせることにとどまらず、さらに深化・発展できるように学習活動を工夫する。

① 個と集団のかかわりの往還

集団での学習は、多様な見方・考え方が表出し、その多様性の中で互いの違いを認め合ったり、問題解決のために折り合いをつけ、合意形成したりすることに意義がある。一方で、個の学習が充実しなければ集団の多様性は生まれてこない。集団の多様性を生み出すために、一人一人の個性や興味・関心、社会的な見方・考え方を生かした調べ学習や思考を表現する時間を保障することで、自分の意見や考えを自覚化し、自分の考えにこだわりをもつことができるようにする。そして、多様性のある小グループや集団の中で自分の意見を再構成することを通じて、自己の考えの変容を実感することができる。このように、「個」→「集団と個のかかわり」→「個」という過程を重視し、多様性のある集団での問題解決の過程で個を育てることを大切にしていく。

② 思考と表現の一体化による社会的な見方・考え方の深化・発展

社会的な見方・考え方を深化・発展するためには、これまで身に付けた社会的な見方・考え方や獲得した概念的知識を他の事例に転移・応用する学習や、別の観点から知識を再構成する（観点変更）学習を意図的に組み込んでいくことが必要である。そのためには、子どもたちの社会的な見方・考え方や獲得した知識の視覚化・表面化（思考と表現の重層化）が欠かせない。友達の考えと自分の考えを比較したり、関連付けたりして問題解決をするためには、互いの考えを同じ土台で表現する必要がある。そのために、思考図を活用した思考操作を取り入れる。思考操作を、単元を通して繰り返し、過ちやつまずき、ずれを発見し、それを修正し、概念的な知識を獲得する過程を大切にする。

③ 未来志向の「深まった課題」の設定

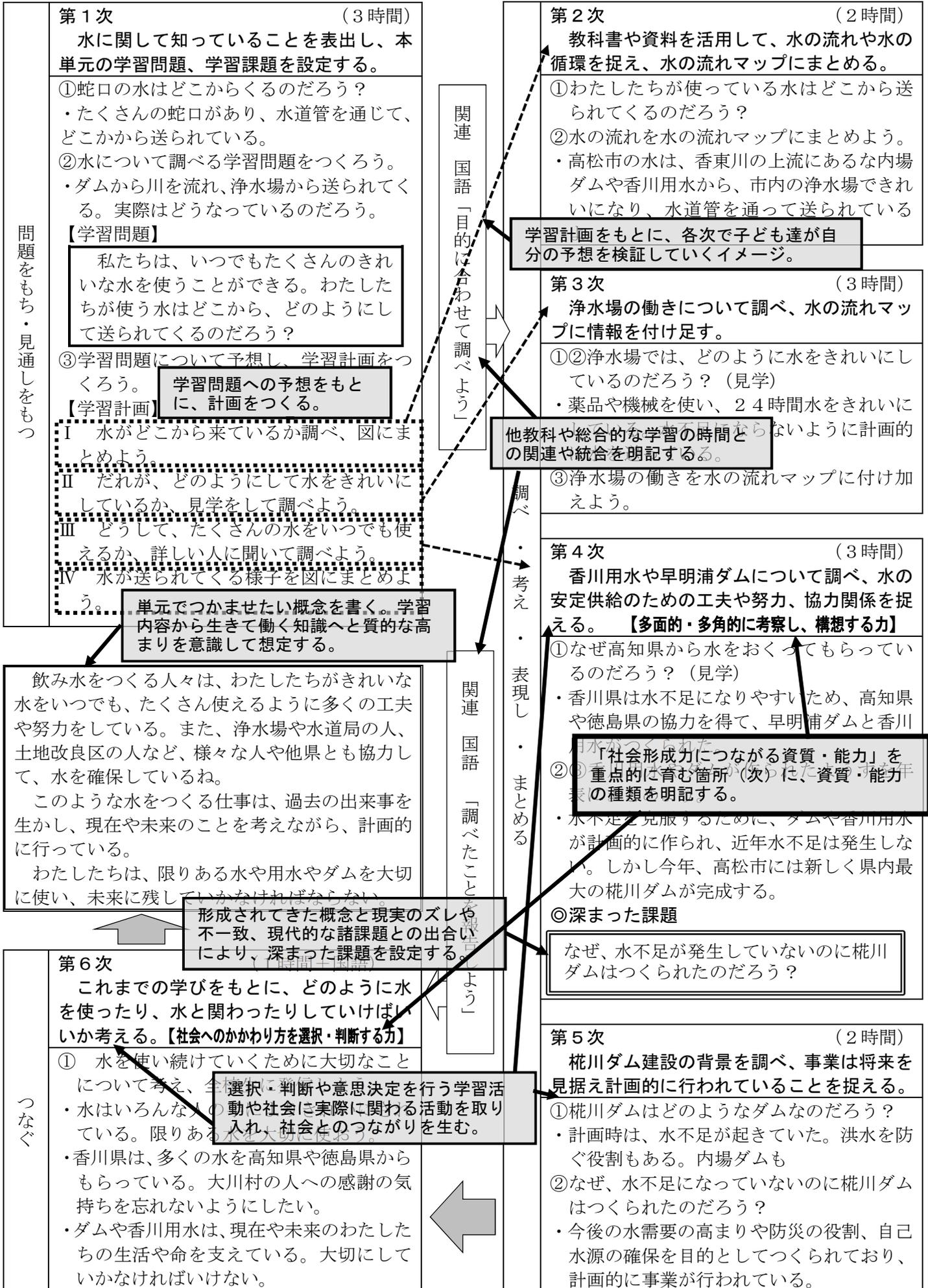
学習のまとめの段階では、単元の学習問題について、これまでに獲得した知識・技能、社会的な見方・考え方を総動員し、問題解決を図る。その過程で、単元で獲得すべき概念的な知識を形成していく。そして、その知識を現代的な諸課題の解決と照らし合わせたり、現実との矛盾やずれ、不一致を見出したりして、深まった課題を設定する。深まった課題は、よりよい社会の在り方や自己の生き方を選択・判断する未来志向の課題を設定し、社会形成力の育成につなげていく。

III つなぐ段階

深まった課題や単元の学習問題に対する自分の考えを言葉や文章、図で表現したりする学習や別の事例を取り上げて獲得した概念的知識を転移・応用するような学習を行ったりして、一人一人の社会参画への足かがりとする。また、今後の社会の在り方や自分たちの生き方を選択・判断する「構想単元」においては、より実社会とのつながりを実感できるような活動を行い、社会に参画しようとする態度を醸成していく。

子どもたちが単元を通して、実社会の「ひと・もの・こと」との交流により考えを深めたり、最終的な子どもたちの考えを社会の人々に評価してもらったりする目標をもつことで、解決したいという思いが切実なものとなる。社会科での学びが、実社会・実生活につながっているという実感を得ることが、新たな学びへの意欲を高めていくことにつながる。

単元構成の例【第4学年 水はどこから】



① 社会的な見方・考え方を働かせる学びの過程を単元構成に表す

ここでは、実際に社会的な見方・考え方を働かせる学びの過程の3段階を示し、段階ごとに重視すべき学習活動や支援の具体について述べる。教材研究により明らかになった知の構造をもとに、子どもたちの実態と照らし合わせながら単元のストーリーを構想する。子どもたちが主体的に追究を進めるためのしかけや支援、協働的な学びを生む学習活動、社会的な見方・考え方を深化・発展することができる思考操作活動や深まった課題の設定を教師が想定し、右の図のような単元構成図を作成する。概念形成の過程と一体化させながらも、子どもの意識のつながりを大切に構想していく。

第1段階 「問題もち・見通しをもつ段階」

見通しをもち、問題をもち場面では、子どものもつ既習知識、既有経験等を大切にしながら、教師の意図的な資料の提示や体験活動によって表出した子どもたちの疑問を整理し、単元を貫く学習問題（問い）を設定する。また、現段階で身につけている知識・技能、見方・考え方を働かせ学習問題に対する予想を話し合い、その予想から学習計画をつくる。

【今後の研究の視点】

- ・学習意欲の向上と主体的に学びに向かう態度の育成に有効な第1次の在り方
- ・問いを生み出すための教師のしかけや支援
- ・学年内での内容のまとめや学年を超えた系統的な学習内容のつながりを生かす具体的方策

第2段階 「調べ・考え・表現し、まとめる段階」

追究する場面では、問題解決のために個による調べやまとめ学習（指導の個別化・学習の個別化）、集団での話し合い活動や様々な表現活動（協働的な学び）を行っていく。その過程では、子ども同士、また多様な他者との関係性（個と集団の学び）の中で、思考と表現を往還する思考操作を繰り返し、これまでに育んできた社会的な見方や考え方を働かせることにとどまらず、育むことができるように学習活動を工夫する。

【今後の研究の視点】

- ・社会的な見方・考え方を働かせる学習活動の在り方
- ・個（指導の個別化・学習の個性化）と集団での協働学習の必要感のもたせ方
- ・概念的知識を生きて働く知識に質的に転換する学習活動の在り方

第3段階 つなぐ段階

学習のまとめの場面では、単元を貫く学習問題に対する自分の考えを言葉や文章、図で表現したりする学習や別の事例を取り上げて獲得した概念的知識を検証するような学習を行ったりして、一人一人の社会参画への足かがりとする。また、今後の社会の在り方や自分たちの生き方を選択・判断する「構想単元」においては、より実社会とのつながりを実感できるような単元づくりを行い、社会に参画しようとする態度を醸成していく。

【今後の研究の視点】

- ・社会とのつながりを実感できる社会につなぐ段階の学習活動の在り方
- ・単元のゴールを見据え、子どもたちが自己の学びをメタ認知しながら学びを進める学習の方策

方策Ⅲ 社会的な見方・考え方を働かせる本時の学習構造

学習活動	予想される児童の意識の流れ	教師の支援と評価
<p>単元の学習問題と本時の学習問題のつながりを意識できるように、単元の学習問題を明記する。</p> <p>(前時まで)</p>		<p>○ ……</p> <p>○ ……</p> <p>授業前の事前の準備や支援を書く。意図的な掲示物、教師の見取りなど。</p>
<p>1 本時の課題を確認する</p> <p>前時の学習について記述した方がよい場合には、点線で区切り、その上に記述する。</p> <p>(2) ……</p> <p>(3) ……</p> <p>※子どもの学習活動を書く。 ～をする。</p> <p>3 ……</p> <p>(1) ……</p> <p>※個の活動か集団での活動かが分かるように明記する。</p> <p>(2) ……</p> <p>子ども同士での交流や全体交流を行う場合、両端矢印をつける。比較・関連・総合の考え方を活用する学習活動とつなぐ。</p> <p>4 ……</p> <p>5 ……</p> <p>右の子どもの反応と学習活動が一致するように記述する。</p>	<p>本時の学習問題を書く。 ※個別の反応を3人程度想定</p> <p>A 予想される反応を記述する。(A児をイメージ)</p> <p>B 予想される反応を記述する。(B児をイメージ)</p> <p>C 予想される反応を記述する。(C児をイメージ)</p> <p>A' B' Aに対して高まった反応や概念を記述する。</p> <p>B' C'</p> <p>C' A'</p> <p>教師教材</p> <p>A" B" に対して高まった反応や概念を記述する。</p> <p>B" C"</p> <p>C" A"</p> <p>※比較・関連・総合することにより、知がつながったり、新たな知が生まれたりする場合は、四角をつなげて記入する。</p> <p>個々の考えが交流を通じて、さらに深まったり、質が高まったりした考えなど、本時つかませたい最終的な概念(学習課題のこたえ)を児童の言葉で記述する。</p> <p>A" B" 個別の認識の深まり・変容</p> <p>B" C" 次時への課題・意欲</p> <p>C" A"</p>	<p>○ ……</p> <p>○ ……</p> <p>～のために、</p> <ul style="list-style-type: none"> → ～する。 → ～を助言する。 → ～を提示する。 → ～と問う。 <p>※教師は支援者であるという立場で記述する。</p> <p>※見方・考え方が働くような、教師のしかけや支援を明記する。</p> <p>※左の子どもの反応と支援と評価の位置が合致するように記述する。</p> <p>評 ……</p> <p>……</p> <p>……</p> <p>目標に対して、子どもたちの達成度を見取る基準を書く。何から、どのように見取るのか。何ができるようになっているかを書く。また、規準に到達していない子どもにどのような支援を行うのかを明記する。</p>

本時の学習指導の過程で重視する点は、個々の考えが社会的な見方・考え方を働かせたり、協働的な学びを経験したりして、個の認識が他者との学びから深まったり、質が高まることで概念が形成されていく過程が分かるように記述する。また、単元の段階によっては、概念が転移・応用され、概念が生きて働く知識・技能へと質的に高まる過程を想定して書く。

【前時まで及びつかむ段階】

本時にいたるまでの学習の過程や、単元の学習問題と本時の学習問題のつながりを想定し、本時の構成を考えていく。教師だけが認識しているのではなく、子ども自身が認識しておくことが大切である。子どもが、「今日は何を学ぶのか」「何を明らかにするのか」を再確認し、見通しをもって本時の学習に取り組めるようにする。

【調べ、考え、表現する段階】

① 社会的な見方・考え方が働くような学習活動・教材・教具

■社会的な見方

□視点Ⅰ「地理的環境と人々の生活」を働かせ→【地図に書き込む、地図を読むなど】

位置や空間的な 広がり の視点	地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、地域、構成、自然条件、 社会的条件、土地利用など
-----------------------	--

□視点Ⅱ「歴史と人々の生活」を働かせ→【年表に表す、資料から読み取るなど】

時期や時間の 経過の 視点	時代、期限、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続 可能性など
---------------------	---

□視点Ⅲ「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」を働かせ→【仕組み図に表す、インタビューするなど】

事象や人々の 相互関係の 視点	工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連 携、対策・事業、役割、影響、多様性と共生（共に生きる）など
-----------------------	---

■社会的な考え方 →「比較・分類したり総合したり、関連付けたりして考える。」

思考と表現を往還する思考操作を繰り返し、知識を再構成する。

本時では、見方・考え方を働かせるための具体的な学習活動を想定する。どのような「視点」で社会事象を捉えるのか、また捉えたことをどのように考えて、問いを解決したり、意味付けたりしていくのか、その具体的な学習活動や使用する教材、教具を明記していく。子どもの反応は、3人程度想定し、活動を通じてどのように認識が変容したり、知識と知識が協働的な学びによって結びついたりしていくか、概念の質的な高まりを想定して書く。

② 社会的な見方・考え方の質的な転換を図る発問・指示

集団の議論を焦点化したり、本質的な学びに導いたりするような、質的な転換を図る発問や指示の在り方を考えていく。子どものつまずきや認識のズレを想定し、具体的な発問指示を考えておく。

例) 具体と抽象の往還 「例えば?」「つまり?」 選択・判断を問う「どちらが?」「一番は?」
自分事として捉える「自分だったら…」 思考をゆさぶる「もし…だったら」

【まとめ・ふりかえる段階】

本時や単元の学習問題に立ち戻ったり、自己の表現物の変容を捉えたりして、学習のまとめやふり返りを自分の言葉で表現する。「分かったこと」(知識)と「考えたこと」(認識)を分けて書くなどの支援を行い、子どもの学びを見取ることができるようにする。

方策Ⅳ 学校教育目標と本時をつなぐ社会科授業構想シート

【単元構想シート】 第3学年 単元名「わたしたちのまち太田と高松市のようす」

学校教育目標	自分・人・地域を愛し、未来を創る子どもの育成	
資質・能力	思いあい 高めあう力	
Bタイプ	学校の特色を生かした「太田ふれあい活動」との統合	
社会形成力	多角的に考察する力、社会への関わりを選択・判断し、構想する力	
1 本単元で目指す子どもの姿 【社会形成力を身につけた具体的な子どもの姿】		
<p>・琴電伏石駅がついに開業したよ。駅前に大きなバスターミナルができて、県立図書館やゆめタウンにもいけるようになったよ。隣の空き地には、コンビニができるとバスや電車を利用する人には便利だと思うな。どんなお店ができるか楽しみだな。 (↑構想する姿) (↓考察する姿)</p> <p>・坂出のおじいちゃん家の近くには瀬戸大橋があって工場が多いね。瀬戸大橋で岡山県とつながって交通が便利だから、工場がたくさんあるんだね。町にはそれぞれ特色があるんだね。</p>		
2 目標 【総括的な単元目標】		
<p>太田地域や高松市の様子について、県内における高松市の位置、地形や土地利用、交通の広がり、市役所など主な公共施設の場所と働き、古くから残る建造物の分布などに着目して、観察・調査したり地図などの資料で調べたりして、白地図などにまとめ、太田地域や高松市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現することを通じて、太田地域や高松市の様子を大まかに理解できるようにする。</p> <p>身近な地域や高松市の様子について主体的に追究し、太田地区のよさや高松市の発展について関心をもち、市民の1人として今後の地域のよりよいあり方を考えようとする態度を養う。</p>		
3 評価規準		
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<p>①市の様子は、地域によってそれぞれ特色があり、違っていることを理解している。</p> <p>②情報を読み取り、絵や地図記号を用いながら白地図にまとめることができる。</p>	<p>①地域の特色を「地形」「土地利用」「交通」「公共施設」「古くから残る建造物」の視点から捉え、私たちの生活と関連付けて考え、地図に表現することができる。</p> <p>②市内の各地域の特色や人々の思いや願いをもとに、自分たちの町の未来を考え、よりよい様子を吟味し、構想することができる。</p>	<p>①地域の様子や住民の願いなどについて、意欲的に学習計画を立てたり、調べようとしていたりする。</p> <p>②町の未来について、自ら進んで考え、発信しようとしている。</p>
4 既習知・生活経験 【本単元につながる既習知・児童の実態等】		
<p>生活科：まちたんけん 太田地区には様々なお店がある。琴電の駅や11号線がある。太田の町については生活経験から詳しく知っているが、他の高松市の地域について詳しく知っている子どもは少なく、子どもたちの間に知識や経験の差がある。</p> <p>初めての社会科単元であり、地図の読み取りや見学・インタビューの経験も少ない。</p>		
5 内容 【本単元で獲得する学習内容】		
<p>高松市は、場所によって地形や公共施設、古くから残る建造物などの様子が違っている。太田の町は、高松の中心にあり、駅や大きな道路があり生活に便利なところだよ。今後は、新伏石駅を中心にいろんな人々が利用できるお店や施設ができると、もっとすてきな町になっていくと思うよ。</p>		
6 方法 【学びを達成するための学びの過程と教師のしかけや支援】		
<p>学習問題：太田の新しい駅や周りの町は、どんな様子になればいいのだろう。高松市の他の地域をヒントに太田の町の未来地図を考え、琴電や市役所の方に提案しよう。</p>		
問題・見通しをもつ	第1次 太田校区にできる琴電新駅の様子や高松市について調べる学習計画を立てる。	
調べ、考え、表現し、まとめる	第2次 高松市の特色ある地域を分担して調べ、地域による違いや地域のよさをくらべ、まとめる。	
	第3次 太田の住民の願いを考え、太田の町がもつ役割や働きについて捉え直す。 深まった課題：伏石駅の周りは、どのように変わっていくといいのだろう？	
社会につなぐ	第4次 太田の町の未来地図を考え直し、市役所や琴電の方に提案する。	
<p>深い学びにするために【主に社会的な見方・考え方を働かせる、しかけ・支援】</p> <p>・身近な地域を軸に市の様子を捉え、他地域と太田の町を比較することで太田地域の特色を見出す。</p> <p>・教室サイズの大きな地図に太田の未来の町を構想する過程で、社会事象の位置や分布と役割を関連付けて捉えることができるようにする。</p>		
主体的な学びにするために		対話的な学びにするために
<p>・ゲストではなく、パートナーとして地域の方と共同的に学ぶ</p>		<p>・視点ごとに分かれたグループでの調べ学習</p> <p>・集団で吟味する場面の設定</p>

【学校教育目標・2タイプの社会科学習】 日常の授業と学校教育目標をつなぐ

本単元で育む資質・能力と学校教育目標で育む資質・能力のつながりを明らかにする。そして、以下のどちらのタイプの社会科学習で資質・能力に迫るのかを明記する。

Aタイプ「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点（関連）に立って資質・能力を育てる社会科学習」

Bタイプ「学校の特色を生かし、教科等横断的な視点（統合）に立って資質・能力を育てる社会科学習」

社会形成力を育む社会科学習の視点から、資質・能力のうち、本単元で重点を置く資質・能力を1つまたは複数をも明記し、学校教育目標とのつながりを確認する。

【1 本単元で目指す子どもの姿】

本単元を通じてどのような子どもを育みたいか、単元を終えた後の具体的な子どもの姿を想定する。特に、本単元で育てたい社会形成力（多角的に考察する力、社会への関わりを選択・判断し、構想する力、根拠をもって主張し、他者を説得する力、他者との合意形成・意思決定する力）について、どのような学習活動を通じて育成できるのかを記述する。社会科の学習により、どのように世界の見え方が変わり、自らの生活を豊かにしているかを記述する。

【2 目標・3 評価規準】

学習指導要領をもとに、単元の総括的な目標を2段階構成で明記する。指導要領内容アの(ア)知識と(イ)技能、及びイの(ア)思考力、判断力、表現力を関連付け、AからGの文脈で示された学びの過程として設定する。さらに、態度に関する目標を学年目標(3)の内容を踏まえて設定する。

◎Aについて、Bに**着目して**、Cして**調べ**
Dに**まとめ**、Eを**捉え**、Fを**考え表現す**
ることを通じて、Gを**理解できるよ**
うにする。

○Aについての学習問題を主体的に追究し、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度と、誇りや愛情、自覚を養うようにする。

指導要領の内容は保障しつつ、研究の主張や単元の工夫に合わせ、目標を付加・修正する。

【内容（ア～ウ）】

Aについて、学習の問題を追究・解決する活動を通じて、次の事項を身につけることができるよう指導する。
ア(ア)Gを理解すること。
イ(C)して調べたりして、Dにまとめること。
イ(ア)Bに着目して、Eを捉え、Fを考え、表現すること。

【学年目標(3)】

学習の問題を主体的に解決しようとする態度、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、～に対する誇りや愛情、～の自覚を養う。

【4 既習知・生活経験】

子どもは、「見方・考え方」を働かせ、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりする。無から新たな知識が生まれるのではなく、これまでの学びや生活経験によって獲得している知識をもとにして、新たな知識を形成していく。

そこで、学習内容の系統性によって分類した視点Ⅰ～Ⅲの香社版社会科カリキュラムの中での、本単元の位置づけを考えることで、これまでの学びとこれからの学びについて学習内容を分析する。また、各学校の実態や地域性などを分析し、本単元の学習内容につながる生活経験を整理する。

【5 内容】

本単元の学習問題に対する答え（概念的知識）を子どもの言葉で書く。目標と照らし合わせ、2段階構成とし、1つ目は、知識・技能及び思考力・判断力・表現力の側面から記述する。2つ目は、深まった課題の解決や社会につながる段階の活動を経て、態度面としてどのような学びを得るのかを書く。

【6 方法】

主体的・対話的で深い学びを実現し、獲得すべき学習内容に迫るための学びの過程や教師のしかけや支援について記述する。まず、学びの過程では、単元の学習問題や深まった課題、第1次からの学びの過程に一貫性やつながりがあるかを確認する。特に、「深い学びにするために」では社会的な見方・考え方を働かせ、育むための具体的なしかけや支援を書く。「しかけ」とは、子どもが自ら見方や考え方を働かせるような教師の間接的な指導・支援、授業づくりである。教材開発、学習活動、単元構成の工夫、「ひと・もの・こと」との出合いなどが考えられる。「支援」とは、子ども達のつまづき等を想定して直接行う指導上の支援である。このような単元全体を見通した「しかけ」と具体的な場面での「支援」の両面から子ども達の学びを豊かにし、支えていく。

視点（研究仮説）Ⅲ…主に実践知の側面から

（教育課程全体を通して他教科や他領域、実社会・実生活等との有機的な関連を図った実践的社会形成力の育成）

教育課程全体を見通した大単元構想により、他教科および他領域との関連を図ることによって、実践的社会形成力の育成を図る筋道を明らかにする。

(1) 教科等横断的な視点から、社会科と他教科・他領域との関連を図り、実践的社会形成力を育てる

社会科では、学んだ内容（社会認識）をもとに公正に判断し、自ら社会へ参画しようとする子どもの育成を目指している。つまり、社会に見られる課題を自分ごととして捉え、その解決に向けて、学んだことをもとに選択・判断し、よりよい社会の実現に寄与しようとする子どもの姿である。このような、自ら社会に参画しようとする態度を養うことこそ、これからの時代に主体的に生きる、平和で民主的な市民を育てることにつながると思っている。

香社研ではこれまで、問題解決過程の中の「つなぐ段階」で、社会参画につながる「実践的知識」の育成を目指してきた。この「実践的知識」とは、社会的事象の確かな理解、思考力・判断力・表現力の育成、社会的な見方・考え方を育み、働かせることをそれぞれ達成した上で、社会との接点をもつことによって育まれる実践知のことである。この実践知の育成を重視し、学校の特色である「生活科・総合的な学習の時間」を軸として、教科等横断的な視点から総合・関連を図った社会科学習を「Bタイプ」と位置付け、実践を積み重ねてきた。子どもたちが自ら社会の形成に参画しようとする実践的な社会形成力を育てるためには、これまでの「Bタイプ」の理念を大切にしながら、社会科と他教科および他領域との関連について、さらに研究を深化させていく必要があると捉えている。そこで、実践的社会形成力を身に付けるために、社会認識を深めていく過程において、どのように他教科・他領域と関連付けたり、経験や既習内容と関連付けたりすることが有効かについて研究を進めていく。中でも総合的な学習の時間との関連に重点を置いて研究を進めることで、「実社会・実生活とつながることのよさ」を生かした社会科学習を展開することができ、ひいてはそれが実践的な社会形成力を育成することにつながると思っている。ここでは、総合的な学習の時間と社会科の学習との関連を示したカリキュラムの年間計画や、関連のいくつかの類型を示すことで、実践的な社会形成力育成への道筋を明らかにしていきたい。

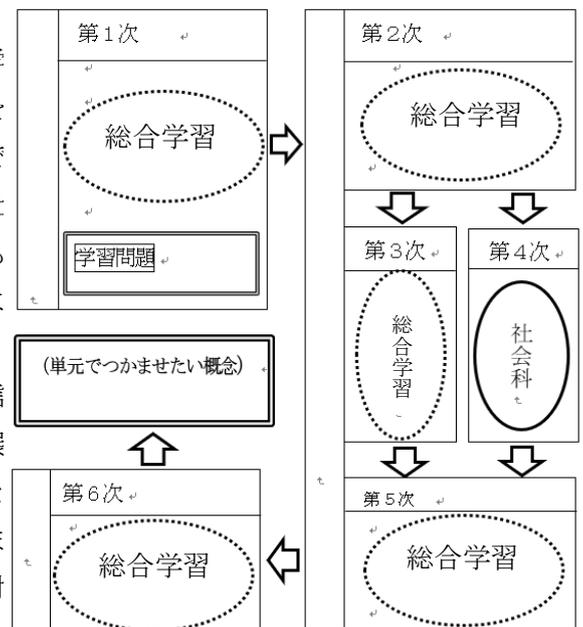
(2) 実践的社会形成力を育むための、問題解決過程の類型について

総合的な学習の時間と社会科との有機的な関連には、いくつかの実践のパターンが考えられる。そこで、これらの関連の在り方をいくつかの類型に整理することで、実践的社会形成力を育成するための道筋を明らかにしていくことをねらう。総合的な学習の時間と社会科とをつないだ類型は、次のようなものが挙げられる。

① 内容統合型

1つ目は、総合的な学習の時間の流れの中で、社会科の学習内容を統合・関連する学びの過程である。総合的な学習を展開する中で出てきた疑問を、社会科の学びを生かすことで解決していく学習過程となっている。このような、総合→社会→総合という学習過程を通して、社会科で学んだことをもとに、総合的な学習の時間において積極的に社会に参画しようとする実践的社会形成力を育成することができる。

例えば「郷土・栗林公園の自然や歴史・文化を世界に発信しよう」という目標のもと、総合的な学習の時間の学びを展開していく例をもとに考えてみる。子ども達はまず、教材として扱う栗林公園の庭園を手掛かりにして、その造りに今まではなかった欧米の視点が入り入れられていることに気付



単元展開例

く。庭園だけでなく讃岐鉄道や四国新道の開通、自転車やガス灯の普及など、香川の中でも文化の様子が変化したことに気づき、どのような背景で変化が起こったのか、疑問をもつ。その疑問を解決するために社会科で明治時代の学習を進めていくといった展開例が考えられる。このように、総合的な学習の時間から生まれた疑問がきっかけとなり、統合・関連する社会科の単元において、明治時代の出来事と郷土の歴史をつなぎながら学びを深めていくことができる展開を想定してみた。更に、明治時代の文化の特色を考えていく中で働かせた見方・考え方が、総合的な学習の時間で明治時代の香川について学習する際に生かすことも可能となるだろう。このように統合・関連を図ることで、総合的な学習で目標にしている「郷土の歴史や文化の発信」の内容が、社会科の学びを関連させることで深化し、社会形成力の育成へとつなげることができる。考える。

② 接点活用型

総合的な学習の時間における実社会との接点を、社会科の学びの導入と終末で活用する学習過程が、接点活用型である。具体的には、総合的な学習の時間でつながった人とのつながりや、そこで見出した課題を生かして社会科の単元の課題を設定することや、単元を通して学んだことをその人に対して発信することである。こうすることで、総合的な学習の時間でつながった「ひと・もの・こと」との学びの連続性が生まれ、実社会とのつながりをよりいっそう意識しながら学びを深めていくことができる。

例えば総合的な学習の時間に「防災」の内容で学習を展開する。その過程で、「消火器で火災を消すにはどうすればいいのか」という課題をもち、消防署の方から消火器を借りて体験活動を行う。この接点を社会科の「火事からくらしを守る」の学習へとつなげることで、総合的な学習の時間での接点を生かした社会科の学びを展開することが可能となる。このように活動を展開することで、社会科の学習においても、実社会とつながることで問題解決に向かうことができるという見通しをもって学習を進めることが可能となる。社会科の単元の課題である「火災被害を減らす方法」について、再び消防署の方に意見を聞いたり提案したりすることで、再度つながり、実社会をより身近に感じながら、実感を伴った学びを展開することが可能となる。

単元の終末では、高松市の火災被害を減らすための具体的な取り組みを選択・判断し、それを消防署の人に提案するという活動を設定した。このように、社会科の単元はじめと終末に実社会との接点を大切に、総合的な学習との接続を図ることで、学びの連続性のある実感を伴った学習過程を実現することができ、そのような学習過程を通してこそ、実践的社会形成力が養われていくものだと考えている。

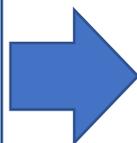
総合的な学習の時間



消火器を借りて体験活動



避難訓練での運営に参画



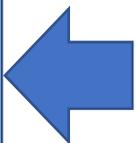
社会科の時間



人との出会いから単元の課題をもつ



学んだことをもとに選択・判断する



実践的社会形成力を育てる学びの過程のイメージ

総合的な学習の時間 「災害から命をまもる」
問題解決の過程で「人」と出会う

3年「火事からくらしを守る」(全11時間)

第1次 (3時間)
高松市の火災の被害を減らす方法を考えるための計画を立てよう。

- ① 高松市で起きた火災のニュースを見て、知っていることや感じたことを話し合う。
- ② 高松市消防局の方に、高松市の火災現況について聞き取り調査をする。
- ③ 実際に起きた火災について知り、単元の課題をつくる。

【学習問題】

高松市の火災による被害を減らすにはどうすればよいのだろう。実際に起きた工場火災の時の対処や、その後の対応について調べたことをもとに考えて、消防局の方に提案しよう。

【学習計画】

- I 木太町で起きた火災について、誰がどう対処したのかを調べよう。
- II 高松市の火災の被害を減らすために、どのような取り組みが必要かを考えよう。
- III 考えたことを、消防局の方に提案しよう。

問題を持ち、見通しをもつ

第2次 (5時間)

木太町で起きた火災について、誰がどう対処したのかを調べよう。

- ① 実際に起きた工場火災の時の関係機関の働きについて、時系列の表から調べ、気付いたことを話し合う。
- ② 火災が起きた際の連絡体制を、関係図に整理する。
- ③ 高松市の消防施設の配置と、火災時の対応について、地図に整理する。
- ④ 消防署の人から、消防署が取り組んでいることや、高松市がこれまで取り組んできたことについて話を聞く。
- ⑤ 被害をより減らしていくために、課題となるところはどこかを話し合う。

深まった課題

火災の被害を減らすために、今ある課題を踏まえて、高松市でどんな取り組みを行うべきか考えよう。

調べ、考え、表現し、まとめる

総合的な学習の時間 「災害から命をまもる」
学んだことをもとに避難訓練の運営、実行

火災の被害を減らすために、消防の人たちは協力して素早く対処できるように、様々な工夫をしているね。でも、消防の人だけでなく、様々な立場の人が、火災に対して、できるだけ早く対処できるようにしておくことが大切だよ。わたしたちも道具の使い方や避難の仕方など、知っておかないと素早くできないことがあるね。これからの自分の生活にも生かしていこう。

第3次 深まった課題 (2時間) 本時2/2

火災の被害を減らすために、今ある課題を踏まえて、高松市でどんな取り組みを行うべきか考えよう。

- ① 火災の被害を減らす取り組みについて、自分なりの解と根拠をもつ。
- ② 友達と話し合い、最適解を見出す。(本時)

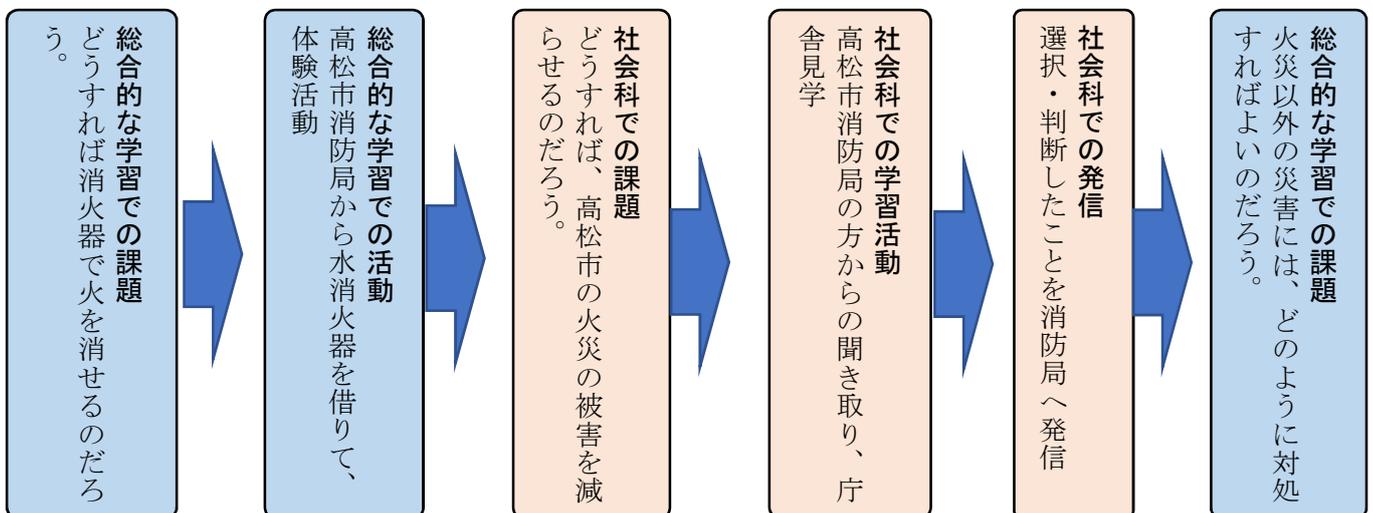
第4次 (1時間)

考えたことを、消防局の方に提案しよう。

- ① みんなで決めた取り組みを、消防局の方に提案する。

つなぐ

実践的社会形成力を育てる、社会科と他領域との関連



実践的社会形成力を育てる学びの過程の例

(3) 実践的・社会的形成力を育てるカリキュラムの年間計画

① 3年生の総合的な学習の時間と、他教科との関連について

月	活動過程	総合的な学習の時間 「災害からいのちを守る」	教科との関連 (3年)	生活知・既習知	
4	問題をもち、見通しをもつ	自然災害について知っていることを話し合い、活動の計画を立てる。		(生活知) 地震や津波、大雨などの災害は、香川県でも起こることがある。	
5		【学習の計画づくり】 ①大雨、洪水の災害の対処の仕方を調べよう。 ②火事の時の対処の仕方を調べよう。 ③地震が起きた時の対処の仕方を調べよう。	社会 「市の様子」		
6		校内の避難訓練を通して、気付いたことを話し合い、課題意識をもつ。		(生活知) 防災センターでの体験をしたことがある。	
7		「より意味のある避難訓練をつくって、地域に広げよう」という課題をもつ。	図工 「みんなが見たくなるマップをつくろう」		
8		校内の防災設備を探し、詳しく調べる。			
8		・調べたことを校内マップにまとめ、掲示する。 ・水の重たさ体験（着衣水泳）	体育 「水泳」		
9		探究し、協働する	消防署へ電話し、消火体験についてのお願いをする。 ・消防署へ消火器を借りに行く。		(生活知) 火事が起きた時は、消火器で消すことができる。
10			消防署の人、学校防災アドバイザーの人と一緒に、水消火器体験を行う。 ・体験を通して感じたことをふり返る。 ・正しい使い方などについて、参観日に保護者へ発信するという見通しをもつ。	社会 「火事からくらしを守る」	
11	参観日に保護者に対して、消火器の正しい使い方を説明する。		国語 「案内の手紙を書こう」		
11	高松市防災合同庁舎を見学する。				
12	香川大学地域強靱化研究センターの金田先生、高橋先生に、地震の対処について話を聞く。		国語 「メモを取りながら話を聞こう」		
12	避難訓練を自分たちで運営する。				
1	社会に出る	活動を通して学んだことを発信する計画を立てる。 ・RNCに取材交渉を行い、取材してもらおう。 ・グループごとに発信の方法を考え、実行する。	国語 「自分の考えを伝えよう」	(生活知) 他のグループが、テレビ局からの取材を受けていた。	
2		1年間のふり返りを行う。			
3		次年度の避難訓練の構想を話し合う。	国語 「取材したことをもとに学級新聞をつくろう」		